実験哲学からの挑戦*

笠木雅史

概要

Experimental philosophy is a new growing field whose core consists in applying the methods of experimental psychology to pre-theoretical intuitions regarding philosophical cases. Traditional philosophy uses such intuitions as evidence for or against a philosophical theory. A camp of experimental philosophy, *experimental restrictionism*, has it that the results of experimental philosophy undermine this methodology of traditional philosophy. This paper goes as follows. Section 1 briefly introduces three camps of experimental philosophy and describes the methodology of traditional philosophy. Section 2 gives a survey of various views on philosophical intuitions, i.e., the kind of intuitions that are supposed to play an evidential role in traditional philosophy. Section 3 sees several experimental results on which experimental restrictionism bases its attack on the methodology of traditional philosophy. Then, Section 4 summarizes the current debate between the proponents of experimental restrictionism and the defenders of traditional philosophy. Section 5 turns to my own defense of traditional philosophy, arguing for the possibility of collaboration between experimental and traditional philosophy.

Keywords: Experimental Philosophy, Philosophical Methodology, Intuition, Expertise Defense.

1 序

「実験哲学(experimental philosophy)」とは、近年英米圏で隆盛を見せている新たな哲学運動を指す。この運動は、伝統的哲学との方法論的相違によって、賛成反対に関わらず大きな注目を集めている。実験哲学の方法論とは、その名が示すように、(1)哲学の諸問題に関する一般の人々(非哲学者)の直観に対し、実験心理学の方法、典型的には、質問紙を用いた統計的調査を実施し、(2)その調査結果を哲学的に分析する、という2つの要素を含んでいる。すでに、認識論、行為論、形而上学、言語哲学、心の哲

* *CAP* Vol. 7 (2014-2016) pp. 20-65. 受理日: 2012.09.15 採用日: 2015.09.25 採用カテゴリ: 研究論文(原著論文) 掲載日: 2015.09.29.

学、科学哲学、倫理学といった事実上ほぼ全ての哲学分野において統計的調査が行われており、また毎月のように新たな調査結果が報告されるなど、実験哲学は大規模な運動となっている[1] [2]。

実験哲学と対置される意味での伝統的哲学の方法論は、哲学者の一人称的直観を、哲学的分析や理論に対する証拠として使用する、というものである。しかしながら、実験哲学者によって行われた実験は、一般の人々の直観が哲学者たちの直観と異なるものであること、また、一般の人々の直観は安定しておらず、様々な偶然的ファクターによって変動するものであることを、しばしば明らかにする。実験哲学は、伝統的哲学の支持者からの多くの批判を受ける一方で、従来の哲学の方法論に批判的であり、科学的方法論の導入を歓迎する自然主義者たちからはおおむね賛意をもって受け入れられている。ただし、自然主義者たちの実験哲学に対する態度も完全に一致しているわけではなく、自然主義にさらなる経験的裏付けを与えるものとして全面的に歓迎するというものから、条件付きでのみその成果を認めるというものまで相違がある[3] [4]。また何より、実験哲学が何を目的としているか、そしてそれが伝統的哲学の方法論に対してどのような含意を持つのかという点に関しては、実験哲学者たちのなかでもかなりの意見の相違があり、一口に「実験哲学」と言っても、その内実は多様である。

Nadelhoffer & Nahmias (2007)によれば、「実験哲学」という名で総称されている活動は、その活動目的と内容から3つのタイプに分類される[5]。

【実験的分析】通常の人々が持つ直観を実験により体系的に調査することは、どの直観が哲学的重要性を持つのかを決定するのに貢献すると考える。伝統的哲学の方法論そのものには懐疑的ではなく、実験哲学をそのための基礎研究とみなす[6]。

---

[1] 実験哲学関連の論文は膨大であり、重要なものであっても本稿でそれら全てに言及することはできない。より多くの参考文献を求める場合は、Alexander (2012)、Sytsma & Buckwalter (forthcoming)、Knobe, Buckwalter, Nichols, Robbins, Sarkissian & Sommers (2012)、Knobe & Nichols (2008, 2013)、Machery & O'Neill (2014)、Nadelhoffer & Nahimias (2007)などの実験哲学への案内を意図した文献を参照のこと。また、新たな実験哲学の成果は、実験哲学者たちが共同で運営するブログ、Experimental Philosophy (http://philosophycommons.typepad.com/xphi/)で報告されることが多い。

[2] 近年の運動以前に存在した実験哲学と見なしうる統計的手法の哲学への応用については、Murphy (2014)に詳しい。

[3] Goldman は自然主義的認識論の第一人者であるが、哲学における直観の使用にかなり寛容であり、この点を批判する Kornblith と一連の論争を展開している。この論争は、Kornblith (2002)の批評である Goldman (2005)と、それに対する応答である Kornblith (2005)に始まり、Goldman (2007)、Kornblith (2007, 2015)まで継続している。哲学における直観の使用をテーマに、両者はそれぞれ Goldman (2010)、Goldman & Pust (1998)、Kornblith (2006, 2014)も著している。

[4] また、実験哲学における幾つかの実験設計は、統計的手法を専門とする Woolfolk (2013)から問題点も指摘されている。しかし、近年の実験哲学の手法は極めて洗練されてきており、心理学や認知科学の専門誌にもその成果が多く掲載されている。実験哲学の手法をより統計的に洗練させようとする提案として、Talbot (2014)、Huebner (forthcoming)がある。

[5] Alexander, Mallon & Weinberg (2010a)、Alexander & Weinberg (2007)、Kauppinen (2007)も、実験的分析と実験的制限主義に相当する分類を行っている。より最近の実験哲学の展開を視野にいれた実験哲学のタイプの分類は、Fischer & Collins (2015b)にある。この分類によれば、質問紙調査だけでなく、より広範な認知心理学のリソースを用いて直観の源泉の解明を行うのが第二世代の実験哲学者であるとされ、Nagel (2012)、Fischer (2014, 2015)、Fischer, Engelhardt & Herbelot (2015)がそこに含められる。この第二世代は、直観の一般的信頼性を認める一方で、直観に関する実験の伝統的哲学に対する批判的含意も認めるという点で、実験的分析に近いスタンスであるように思われる。

[6] 実験的分析を支持する論文として、Knobe (2003a, 2003b, 2004a, 2004b)、 Nadelhoffer (2005, 2006a, 2006b)、

【実験的記述主義】どのような直観を人々が持っているのかということよりも、それを生じさせる心理メカニズムを実験的手法によって解明することを目指す。直観そのものが証拠になるのかどうかという点にはあまり関心を向けず、そうした心理メカニズムの解明そのものが哲学的意義を有しているとする[7]。

【実験的制限主義】実験の結果は、いかに人々の直観が不安定で信頼不可能なものであるかを明らかにすると考える。その結果、哲学における証拠としての直観の使用は全面的に禁止されるか、少なくとも極めて限られた範囲でしか認められないとし、直観に対する懐疑論を提唱する[8] [9]。

これら三つの立場はそれぞれ興味深いが、本稿では主に実験的制限主義を取り扱うことにする。この選択は決して恣意的なものではない。というのも、実験的制限主義が伝統的哲学の方法論に対して提示する懐疑論には伝統的哲学の側からの激しい反論もあり、最も議論を巻き起こしている立場であり、また、この議論を検討することは、伝統的哲学の方法論をより深く理解する一助となると考えるからである[10]。さらに、実験哲学を巡る議論は厖大なものになるため、その全体像を描写することは限られた紙幅では難しい。むしろ、実験的制限主義に焦点を絞り、それを巡る議論を詳細に描写することが、今後の実験哲学の日本への導入、発展のためには有意義であると考える（したがって本稿は、実験的制限主義を巡る議論のサーヴェイとしても意図されている）。

実験的制限主義と伝統的哲学の議論を正確に理解するためには、実験哲学と対置される伝統的哲学の方法論、特に伝統的哲学における直観の認識論的役割についての理解が不可欠である。したがって、本稿では、以下のように議論を展開する。まず、伝統的哲学の方法論である反照的均衡法を手短にまとめ、そのなかでの直観の役割を説明する。さらに、他のタイプの直観とは区別される、哲学において重要

Nahmias, Coates & Kvaran (2007)、Nahmias, Morris, Nadelhoffer & Turner (2005, 2006)、Nichols (2004a, 2004b)、Nichols & Ulatowski (2007)が挙げられている。以下の二つの立場についても同様に、挙げられている論文を注で記す（幾つかの論文の書誌情報は、より正確な情報に訂正した）。

[7] Greene (2002, 2003, 2008)、Greene & Haidt (2002)、Greene, Nystromm, Engell, Darley, & Cohen (2004)、Knobe & Doris (2010)、Nadelhoffer (2006a)、Nichols & Knobe (2007)。

[8] Alexander & Weinberg (2007)、Machery, Mallon, Nichols & Stich (2004)、Mallon, Machery, Nichols & Stich (2009)、Nichols, Stich & Weinberg (2003)、Weinberg, Nichols & Stich (2001)。実験的制限主義を支持する他の論文として、Alexander & Weinberg (2014)、Machery (2011, 2015a)、Nadelhoffer & Feltz (2008)、Sinnott-Armstrong (2006, 2008)、Stich & Tobia (forthcoming)、Weinberg (2007)、Weinberg, Alexander, Gonnerman & Reuter (2012)、Weinberg & Crowley (2009)、Weinberg, Gonnerman, Cameron & Alexander (2010)がある。実験的制限主義の定式化にあたり、いささか厄介なのは、実験的制限主義者に分類される者の立場には、制限される直観がどのようなものなのかについて、論文ごとに相違があるということである。例えば、Weinberg, Nichols & Stich (2001)は、この論文単体で見るならば、知識に関する直観だけを問題視しているが、Alexander & Weinberg (2007)はこの論文の実験結果を哲学的直観一般を制限する根拠と見なしている。また、実験的制限主義の擁護や批判は、広範な直観の制限という論点を巡って行われることが多い。このため、本稿では、実験的制限主義を哲学的直観への広範な制限を加える立場として理解する。この実験的制限主義の定式化にまつわる厄介さについては、Alexander (2012: 71–2)、Nado (2013: 19–20, 2014b: 1029)も指摘しているが、彼らも実験的制限主義を哲学的直観に対する広範な懐疑論として理解している。

[9] 実験的分析は実験的制限主義とは両立しえない立場であるが、両者ともに実験的記述主義とは両立可能であり、Joshua Knobe のように実験的分析と実験的記述主義にともに分類される論者もいる。また、実験哲学の論文は共著であることが多いため、実際に個々の哲学者がどの立場を支持しているのかを特定するのは容易ではない。

[10] 実験的制限主義に対する伝統的哲学からの反論は、「実験哲学とその批判者たち」と題した特集を行った *Psychological Philosophy* (2010) 23 (3)、23 (4)における諸論文に詳しい。これらの特集号の内容は、Horvath & Grundmann (2012)として書籍化されている。

な役割を果たす直観とはどのようなものなのかについて、幾つかの立場を紹介しつつ概観する（2節）。次に、哲学における直観の使用に対する幾つかのタイプの批判を簡略に記述し、特に実験的制限主義が伝統的哲学の方法論への批判の根拠とする幾つかの実験の結果を詳述する（3節）。その後、実験的制限主義が提示する直観に対する懐疑論への伝統的哲学からの応答とそれに対する実験的制限主義からの再批判を紹介する（4節）。最後に、この論争に対する筆者自身の見解をまとめ、実験哲学と伝統的哲学の共存の可能性を探る（5節）。

2 反照的均衡法と哲学的直観

伝統的哲学と言っても様々であるが、実験哲学と対置される意味での伝統的哲学の方法論を、まずは簡単に特徴づけておきたい。伝統的哲学の方法論によれば、ある哲学的分析や理論の正当化は、反照的均衡法(the method of reflective equilibrium)を用いて行われる。哲学的分析や理論が目標とするのは、哲学的に重要だと見なされる性質や関係――知っている、良い、意図的に行為する、因果的に引き起こす等――の成立、不成立のための一般的条件や原理を特定することである。こうした理論を正当化、反証するための有力な規準となるのが、狭義ないし広義の反照的均衡である。すなわち、ある特定の性質や関係の成立、不成立に関する様々な現実的、仮想的事例に対する我々の直観を集め、ある哲学的理論に合致しない、またはそれが説明できない事例（反例）があるならば、その理論は放棄ないし改訂される。また、理論に合致しないような直観は、しかるべき理由があるならば棄却される（この理由がどのようなものかについては、様々な見解がある）。こうした相互調節を繰り返し、哲学的理論と直観を最適の反照的均衡状態にもたらすことが、哲学的理論を正当化する標準的方法とされるのである（狭義の反照的均衡法）。さらに、その理論が他の分野における直観、理論と一致するように、より広範なレベルでこの手続きは繰り返される（広義の反照的均衡法）[11]。

反照的均衡法として理解された伝統的哲学の方法論は、直観により合致する、ないしそれをよりうまく説明できる理論が他の理論に比してより正当化されるという点において、直観を理論に対する証拠として扱う。また同時に、直観に合致しない、ないしそれを説明できない理論は他よりも正当化の度合いが下がるという点において、直観を理論を反証するための証拠として扱う。このように直観が理論に対する証拠とし

[11] 反照的均衡法は通常、信念と原理の均衡を用いて説明されるが、ここでは Bealer (1998c)に習い、直観を信念に置き換えて記述した。本稿の説明は極めて簡素なものだが、哲学における反照的均衡法の具体的な適用手順は、Henderson & Horgan (2011, ch. 2)で詳述されている。

て機能することは、伝統的哲学においてほとんど自明視されてきたと言ってもよい[12] [13] [14] [15]。例えば、Kripke は自己の理論を直観に訴えつつ擁護する際に、次のように述べている。

> 直観を持つことは、どのようなものであれ、それを支持する重大な証拠だと私自身は考えている。人々が究極的に、直観以上に決定的などのような証拠を持つことができるのか、私は本当に分からないのである。(Kripke 1980: 42)

しかし、このように直観が証拠として機能するとしても、反照的均衡法による正当化手続きそのものは何ら哲学に特有なものではない。例えば、直観を経験ないし観察に置き換えて考えるならば、経験科学一般は、大まかに言って、反照的均衡法に従っていると言うことができる。また、論理学や数学といった非経験的とされる科学も、ある程度は直観に依拠せざるをえないだろう[16]。端的に言えば、反照的均衡法は、個別的な直観、観察によって一般的な原理、理論を正当化するための汎用的な帰納的手続きと見なすことができる[17]。したがって、哲学が他の学問から方法論的に区別されるとすれば、その独自性を、反照的均衡法という正当化手続きではなく、哲学において用いられる直観の特殊性に求めることは自然な方向だと思われる。事実、多くの伝統的哲学者は、哲学において重要な認識論的役割を果たす直観を、感覚的直観や内観的直観といった他のタイプの直観と区別して、「哲学的直観(philosophical intuition, rational

---

[12] もちろん、伝統的哲学において、直観が理論の正当化、反証という機能しか持たないということはない。例えば、Praëm & Steglich-Petersen (forthcoming)が指摘するように、ヒューリスティクスとしての直観の役割も、議論されることは少ないが、広く認められている。

[13] 「直観」という概念は哲学において長い伝統をもつが、ここでは比較的最近の用法に従い、他の伝統的用法は度外視している。近年の直観概念の普及以前にも、それに対応する概念を見いだすことは比較的容易い。一例として、Russell (1912: 25)は反照的均衡法とほぼ同様の形で哲学の方法論を記述する際、「本能的信念」という語を用いている。実験哲学の登場までを含む、倫理学におけるこの意味での直観の使用についての歴史的概観には、Appiah (2008, ch. 3)が詳しい。またこうした直観概念の近年の普及に対して、Hintikka (1999)は、Chomsky の言語学の影響を指摘している（言語学における直観の扱いについては、Maynes & Gross (2013)を参照のこと）。この点の実証的検討を含む、哲学者の「直観」や関連する語の使用頻度の年代別分析は、Andow (2015b)にある。

[14] 直観が哲学的分析、理論に対する証拠となるという見解をどの程度の哲学者が持っているかを統計的調査によって確かめようとする興味深い試みが、Kuntz & Kuntz (2011)にある。彼らが282人の哲学者に対して実施した実験の結果は、「直観は正当化にとって有益である」とする者がおよそ50．9%、「直観は正当化にとって本質的である」とする者はおよそ23．5%であるというものだった。この結果は興味深いが、Buckwalter (2012)が指摘しているように、Kuntz & Kuntz の実験には様々な問題がある。

[15] 実験哲学登場以前の仮説的事例に関する直観の使用への批判は、Sorensen (1992, ch. 2)、Ward (1995)、Wilkes (1988, ch. 1)を参照のこと。

[16] 反照的均衡法の明確化には、Goodman (1965)と Rawls (1971)が多大な貢献をしたが、前者は反照的均衡法を論理学の正当化に使用し、後者は自然科学の方法論をモデルに反照的均衡法を理解している。

[17] 以下の（A3）哲学的直観の意味論的内容で述べるように、哲学的直観の内容がどのようなものでありうるかは議論があるが、ここで主に記述しているレベルの反照的均衡法（狭義の反省的均衡法）は、「事例による方法(the method of cases)」とも呼ばれ（この用語の初出は、Mallon, Machery, Nichols & Stich (2009: 338)であり、指示の理論に対して用いられたが、現在では伝統的哲学一般に対して用いられる）、事例に関する個別的な直観による一般的分析、理論の正当化に関わる。そのため、本稿では基本的に、哲学的直観は何らかの意味で個別的な内容を持つと想定する。ときに、「決定論と意志の自由は両立（不）可能である」といった、非哲学者が常識的に（非反省的に）抱いている一般的、理論的内容を持つ見解も「哲学的直観」と呼ばれるが、これは「民間理論」とでも呼ぶことが適切であり、直観と区別すべきだと考える。民間理論と哲学的分析、理論の関係にも反照的均衡法を適用することができるが、それは異なるレベルの反照的均衡を求める手続きとなる。

intuition, intellectual intuition)」と呼んでいる[18]。

しかしながら、哲学者の間でも、哲学的直観とは哲学的な事例に関する直観であるという特徴付け以外に、「哲学的直観とは何か」、また「哲学的直観を可能にする能力とは何か」といった点に関して何ら実質的な合意があるわけではない[19]。この主題に深入りすることは本稿の目的を大きく超えるが、ここでは簡単に、哲学的直観の（A1）認識論的身分、（A2）心的身分、（A3）意味論的内容、（A4）源泉、について相違する見解を紹介しつつまとめておきたい。

（A1）哲学的直観の認識論的身分

この点については比較的合意が達成されていると言ってよい。そもそも哲学的直観が理論を正当化するためには、その直観そのものが正当化されていなければならない。多くの場合、直観の正当化は、知覚をモデルにして外在主義的に（より正確にはプロセス信頼主義的に）理解される[20]。知覚能力・プロセスが信頼可能であることによって個々の知覚が正当化されるのと同様に、直観能力・プロセスが信頼可能であることによって個々の直観は正当化されると考えられるのである。そして、この信頼可能性は、知覚の信頼可能性がそうであるのと同様に、直観能力が不可謬であることを要求しない。知覚能力が理想的ではない状況で誤ることがあるように、直観能力も誤りうる。その場合、直観の正当化は阻却されることになる。このような直観の可謬性からは、直観が理論に与える正当化も、直観の誤りが明らかになったときには阻却されるということが帰結する。換言すれば、直観は理論に対する決定的証拠ではなく、阻却可能な証拠(*prime facie* evidence)であるに過ぎない。なお、直観の与える正当化は、知覚経験やそれに関する能力に認識論的に依存しないという意味でアプリオリであると、多くの論者は考える[21]。

---

[18] 「哲学的直観」という用語は、ときに論理学的、数学的直観を含む、アプリオリな直観と同義である広い意味で使われ、また哲学的対象にのみに関わる狭い意味でも用いられる。ここでは狭義の哲学的直観を念頭に置いている。本稿では、多様な見解を含めるために、「哲学的直観」という用語の意味をこれ以上限定しないが、この語に含まれる多義性の分析と哲学的直観の分類に関しては、Cappelen (2012)、Cohnitz & Haukioja (2015)、Jenkins (2014)が有益である。

[19] 伝統的哲学の方法論に肯定的であっても、哲学において直観は極めて限定的な役割しか果たしていないとする論者もいる。彼らは、直観が哲学的分析や理論に対する証拠となるという見解そのものが、伝統的哲学の方法論の誤解から生じていると考えるため、伝統的哲学の方法論に対する実験的制限主義の批判も大した効力を持たないとする。Cappelen (2012, 2014b)、Deutsch (2009, 2010, 2015a, 2015b)、Earlenbaugh & Molyneux (2009)、Ichikawa (2009a, 2012, 2014b)、Molyneux (2014)、Williamson (2007b)を参照のこと。Cappelen (2012)の議論は、Bengson (2014)、Chalmers (2014)、Weatherson (2014)、Weinberg (2014)で批判的に検討されており、Cappelen (2014a)はそれらへの応答である。また、Nado (forthcoming)は、Cappelen、Deutsch、Williamson らの哲学方法論の理解は、直観の証拠としての重要性を十分に否定できていないと論じる。

[20] Bealer (1996a, 1998b, 1998c, 1999, 2008)、Goldman (2007, 2010)、Goldman & Pust (1998)、Sosa (1998, 2006, 2007a, 2007c)、Thurow (2013)らは皆、（広い意味での）プロセス信頼性主義の立場から、直観の証拠としての妥当性を擁護している。彼らは皆、そもそも信頼性主義の支持者であるが、実験的制限主義の伝統哲学への批判は、哲学的直観は信頼不可能であるというものであり、伝統的哲学からの応答は常に、いかに哲学的直観が信頼可能であるのかを示すという形をとる。多くの伝統的哲学の擁護者は、ここで問題になっている信頼可能性の意味を外在主義的な意味で理解することが多いが、一部の実験制限主義者は近年、より強い意味で理解されるべきだと論じている。この点は、伝統的哲学と実験的制限主義の対立点を見極める点で非常に重要であるが、本稿では十分に議論することができない。この点に関しては、注61も参照のこと。

[21] 例外は Goldman (2007)、Kornblith (2002, 2006, 2007)であり、彼らは直観をアポステリオリなものだと考える。また、Williamson (2007a, 2007b, ch. 6)は、仮説的事例に関する認識論的検討を通じ、アプリオリ・アポステリオリという区別は、あまりにも粗雑で直観的判断の分類には適切ではないと論じている。直観をアプリオリだとみなす論者でさえ、直

（A2）哲学的直観の心的身分

近年の議論において、一般に直観を持つということがどのような心的態度なのかという点に関しては、大別して二つの立場がある。一つは Bealer (1992, 1996b, 1998c)に代表されるものであり、p という内容を持つ直観を、p であると思われるという「知的な見え(intellectual seeming)」という特殊な心的態度として捉える立場である。他方は Sosa (1998)に代表される立場であり、直観を「信じる傾向性」として理解する[22]。両者に共通するのは、p と直観することは、p と信じることではないという見解である。例えば、ミュラー＝リヤーの錯視における二本の線は、直観的に一方の線が他方より長く見えるが、この直観はそれを信じていない場合でも（また、その否定を信じている場合でさえ）、同様に生じるものである[23]。また、素朴集合論の包括公理とラッセルのパラドックスの関係をを知っており、包括公理を誤りだと信じている人にとってさえ、それが正しいという直観は容易になくなるものではない。また逆に、複雑な数学の証明結果を、それが直観的に正しいと思われなくても信じるということは頻繁に起こる。こうした事実が示唆するのは、直観一般が信念と異なる心的態度であるということだけでなく、他の信念によって比較的影響されにくいということである。さらに、現象学的特徴や（A1）認識論的身分、また（A3）で述べる内容の様相性によって、直観一般は憶測や推測といった心的態度とも区別される。それ故、哲学的直観も直観である以上、こうした心的態度とは区別される。

（A3）哲学的直観の意味論的内容

この点に関しては、様々な見解が存在するため、ここでは手短に解説するだけにしておく。まず、BonJour (1998)、Kripke (1980)、Sosa (1998; cf. 2006, 2007a)のように、一般的な命題が哲学的直観の内容となりうるとする論者もいるが、伝統的哲学の方法論を考える際、多くの論者が、哲学的直観の内容を特定の現実的、仮想的な事例に関する個別的なものに限定している。これは、反省的均衡法に即した哲学的直観による哲学的分析、理論の正当化が、科学における個別的な観察による一般的な理論の正当化に類比的に考えられるからである。しかしながら、哲学的直観と観察が個別的な内容を持つという点で類似するにせよ、両者は様相において異なると考える論者は多い[24]。Sosa は、哲学的直観の内容は一般

観による正当化が経験的に阻却されるということを受け入れるため、本文中のアプリオリ性の意味は、直観による正当化に経験が介在しないという意味である。この意味でのアプリオリ性についての哲学的、また哲学史的考察として、Casullo (2007)が有益である。実験哲学の成果が、哲学のアプリオリ性を損なうものではないという見解は、実験哲学者の Weinberg (2013)、伝統的哲学者の Ichikawa (2013)が別の観点から擁護している。

[22] Bealer と Sosa の意見交換として、Bealer (1996a, 1996b, 1998c)、Sosa (1996, 1998)を参照のこと。Sosa は(2006, 2007a, 2007c, ch. 3, 2013, 2014)において、以前の立場を放棄し、直観を「信念あるいは同意への魅了」とする立場へと移行している。Lynch (2007)によれば、この移行を促したのは、直観することは意識的であるが、信念への傾向性は意識的ではないという、Bealer (1998c) の批判である。Bealer 流の直観を見えとして理解する立場を、認識論の伝統的ドグマから生じたものにすぎないとして、Williamson (2004, 2007b, ch. 7)は批判する。他方、Chudnoff (2011a, 2011b, 2013)、Bengson (2015)は、他の立場からの批判に対し Bealer 流の立場を擁護する。

[23] ミュラー＝リヤーの錯視における「見え」は、視覚的な見えとして通常理解されるが、知的な見えとして理解することもできる。Sosa (2007c, ch. 3, fn. 3: 48)を参照のこと。

[24] 観察は常に現実的な事例に関するものであるが、哲学的な直観は、仮想的な事例に関するものも存在する。少なくとも仮想的な事例に対する直観の内容は現実性以外の様相を含むと考えることは、極めて自然である。

的な場合もあるとする一方で、個別的な場合でも、その内容は様相的に強い命題（必然的にしかじかという命題）だとする。また、Bealer (1992, 1996b, 1998c, 2008)も直観が必然性という様相を含むと考え、「我々が、哲学的直観を持つとき、例えば、if p then not not p という哲学的直観を持つとき、それは必然的なものとして提示される。つまり、それ以外でありうるとは我々には見えないのである」(Bealer 1998c: 207)と述べる。こうした見解に対し、Goldman (2007)は、最も頻繁に起こる直観は、彼が分類直観(classification intuition)と呼ぶ、「aはFである（概念Fが個体aに適用される）」という内容のものであり、哲学的直観を常に様相的直観であるとする必要はないと論じている[25] [26]。

（A4）哲学的直観の源泉

哲学的直観の証拠としての妥当性を説明するために、他のタイプの直観や心的態度を持つ能力とは区別される独自の能力として、哲学的直観能力なるものを措定することは、その能力が何に由来するのかについての実質的説明が与えられなければ、単なる能力心理学だという批判を免れないだろう。そうした実質的説明を与えるために、多くの論者は我々の概念把握と直観の密接な認識論的関係を持ち出す。概念Fは通常、語「F」の意味と同一視されるか、少なくとも概念Fに対応する何らかの言語表現が存在すると考えられる。そして、哲学的直観は、概念かそれに対応する語の意味の理解に由来すると説明されるのである。一例として、Bealer (1998a, 1998b, 1998c, 1999, 2008)は、概念を把握する必要条件は、その概念を内容として含む心的態度を信頼可能な形で持つことができることであるとした上で、哲学的直観の信頼可能性は概念把握の条件から導かれる、と論じている[27]。哲学的直観の源泉を概念把握とする見解は

---

[25] Goldman がしているように、Bealer の先の引用を直観の内容についてのものとして解釈するのは一般的であるが、この引用に続く箇所で、Bealer はこうした見解には慎重な態度をとっているように見える（また Weinberg (2007)は、Bealer の引用箇所を、直観の確からしさの強さ、つまり直観の現象学的特徴について述べているものとして読んでいる）。

[26] 哲学的直観が必然性を内容として含むという考えは多くの支持者を持ち、Ichikawa (2009b)は、それをもとに直観を単なる偶然的な反実仮想的判断とする Williamson (2005, 2007a, 2007b)を批判している（ただし、Williamson は (2007a, 2007b)では、(2005)とはやや立場が異なり、哲学における反実仮想的判断に対して「直観」という語を適用することを避けている。この点は重要だが、本稿では彼の立場を一貫して「直観」という語を用いて記述することにする）。Goldman は分類直観の例として、ゲティアケースに対して生じる「この認識主体は知ってはいない」という直観を挙げているが、Ichikawa & Jarvis (2009)によれば、そうしたときに起こる直観は様相的であり、簡略化して言えば、「必然的に、もし認識主体がこの状況にいれば、彼は知ってはいない」という内容を持っている。また、Malmgren (2011)は、この場合の直観の内容は必然性ではなく可能性を含むという見解を擁護する。

[27] もちろんこうした信頼可能性は、自然種語のような意味が外延を決定しない語、ないしそれに対応する概念に対しては成立しない。哲学的に重要なほとんどの概念は、この種の概念（彼が意味論的に不安定と呼ぶ概念）ではない、と Bealer は論じている。この点に関して詳しくは、Bealer (1999a, 1998c, 1999, 2008)を参照のこと。また、Jackson (1998)は二次元主義的意味論を採用し、意味論的に不安定な概念の内包を A-intension と C-intension に区別した上で、前者はアプリオリに直観によって把握可能であるとする。直観と概念の関係を単に認識論的なものではなく、前者が後者を（全面的に、あるいは少なくともある主題に関しては部分的に）構成するという意味論的な関係だとみなす論者には、Cohnitz & Haukioja (2015)、Goldman (2007, 2010)、Goldman & Pust (1998)、Horowitz (2015)、Jackman (2005)、Jackson (1998)、Johnson & Nado (2014)、Weatherson (2003)がいる（この種の見解の実験的制限主義者による検討として、Weinberg & Crowley (2009)も参照のこと）。しかし、彼らが概念とは何かということに関して一致した見解を持っているわけではない。例えば Goldman & Pust (1998)は、直観と深く関わる概念を脳内で組織化される個人的なものと見なし、直観と他の意味での概念の結びつきを否定する。Goldman がこの見解に至る議論が誤った想定にもとづいているという批判は、Pust (2001)、Grundmann (2007)にある。Goldman (2007, 2010)の立場は、個人レベルでの概念は直観に対する第一次的重要性を持つという見解を維持しつつも、それと共同体レベルでの概念との関係を認

様々な形をとりうるが、Bealer の立場は、適切な直観とそれに基づく正当化や知識を持つことが、概念把握のために要求されるとするものである。このことは、分析性を文や命題の真理に関する立場としてではなく、その認識論的な意義から理解する分析性の認識論的理解と呼ばれる立場と極めて親和的である[28]。この立場の利点は、直観に依拠する哲学的知識を、概念把握のみに由来し経験に依拠しないという意味で、アプリオリなものと見なすことができ、「哲学的知識はアプリオリである」という伝統的見解を維持することができるという点にある[29]。

3 実験哲学からの挑戦

伝統的哲学の方法論に対する批判としては、反照的均衡法による正当化という枠組みそのものに疑問を提起するものは従来から存在したが、哲学的直観の証拠としての妥当性は、近年までほとんど批判の対象とされてこなかった[30]。しかし、実験哲学の登場と前後して、様々な批判が展開されつつある。そうした哲学的直観の証拠としての妥当性に対する近年の批判には、大別して、（B1）周知の認知的バイアスからの一般化、（B2）調整問題(calibration objection)、（B3）理論による汚染(theory contamination)、（B4）直観の多様性、不安定性の指摘、という4つのタイプのものがある。

実験制限主義が伝統的哲学の方法論に対する疑念を提示する際、多くの場合において、これらの4つの批判のいずれかを、直接的ないし間接的に援用している。ここでそれぞれを簡単に説明しておくと、まず、（B1）は Tversky & Kahneman らによって代表される実験心理学、実験経済学の結果からの一般化であり、推論や確率判断といった特定の種類の心的プロセスが様々なバイアスを避けられないという実験結果を一般化し、哲学的直観も同様に何らかのバイアスの影響を受けるはずであり、それ故に信頼不可能であると論じる。（B2）は Cummins (1998)によって展開されたもので、哲学的直観は哲学理論に対するデ

めるものに変化している。これらの哲学者の見解と全く異なる、哲学的直観が概念把握ではなく事象そのものの理解に由来するとするいう立場は、Sosa (2007b, 2011)、Williamson (2007b)にある。この点の相違は、単に哲学的直観の源泉に関するものではなく、哲学的探求、分析の対象が何であるのかという問題に関わる（これは注29で触れる（A6）哲学的直観の対象とは何かという問題である）。

[28] Boghossian (1997)は、分析性についての幾つかの異なる理解を整理しつつ、認識論的理解を擁護している。Williamson (2007b)は、あらゆる意味での分析性を批判する。両者の意見交換として、Boghossian (2011)と Williamson (2011a)がある。

[29] 本稿で触れられなかった直観に関する論点として、さらに（A5）哲学的直観の現象的特徴、（A6）哲学的直観の対象がある。本稿の視点とは異なるが、哲学における直観に関する諸見解のサーヴェイとして、Fischer & Collins (2015b)、Nagel (2007)が有益である（Nagel のものは、哲学的直観の一種である認知的直観（知識や正当化といった認識論的事柄に関する哲学的直観に関するものだが、多くの論点はそれ以外の哲学的直観にも妥当する。また、Ichikawa (2014a)も簡単ではあるが、現代哲学における直観の扱いをまとめている）。さらに、*Essays in Philosophy* (2012) 13(1)は「哲学的方法論」の特集号となっており、多くの論文が哲学的直観と関連する主題を論じている。

[30] 反証的均衡法を哲学の方法論と見なすこと、あるいはその方法論的な妥当性そのものに批判がないわけではない。従来の批判とその応答については DePaul (1993, 1998)、近年の批判とその応答については Walden (2013)を参照のこと。また、反照的均衡法の問題点は、以下の（B1）で触れる Tversky & Kahneman らの研究によって起こった、いわゆる合理性論争(the rationality debate)においてもさかんに論じられた（Stein (1996, ch. 5)などを参照のこと）。そもそも実験的制限主義の伝統的哲学の方法論に対する批判は、Stich (1988, 1990, ch. 4)に由来し、Stich の実験的制限主義は、自身が参加者であった合理性論争の影響が強い。Stich が実験哲学を創始した背景には、これらの著作における批判により経験的な根拠を与えようという動機がある。

ータであり、科学における観測器具によって観測される観察データに相当するが、観測器具がどの場合に正しい観察を伝えるのかには、その観察器具に依存しない基準が存在するため、観察器具を客観的に正しく調整することが可能であるのに対し、直観の正しさの基準としては直観以外に頼るものがないため、直観の信頼性を客観的に判定、調整する方法がない、という問題である[31]。この（B2）は、特に実験的分析と実験的制限主義を区別する際に重要となる。というのも、前者は統計的調査が（B2）の解決に貢献しうると考えるのに対し、後者はそのような見込みは低いと考え、直観に依拠する方法論そのものの放棄を提唱するからである。（B3）は、哲学者の直観は自分がコミットしている理論を支持するように影響されるはずであり、それ故その証拠とはならないという批判である[32]。

本稿の主題である実験的制限主義の伝統的哲学の方法論への批判の中核は、実験結果に基づく（B4）にある。この批判は、哲学的事例に対する実験（統計的調査）の結果をもとに、「哲学的直観は、参加者の属する文化や社会・経済的身分、事例が提示される順番といった哲学的分析、理論の真理に直接関係しないファクターによって大きく変動する」と指摘し、「哲学的直観は一般に不安定ないし信頼不可能である」と結論する。この批判は、哲学的直観を対象とする実験によってえられた直接的な証拠に基づいているという点で、間接的な証拠に基づく（B1）や、（現在のところ）経験的な検証が行われていない（B3）よりも強力なものである。以下では、（B4）が依拠する幾つかの実験を詳しく紹介する。

Weinberg, Nichols & Stich (2001)（以下 WNS）は、文化的相違や社会・経済的身分の相違がどのように直観に影響を及ぼすのかを調べるために、様々な統計的調査を行った[33]。ここでは特に重要と思われる二つのみを紹介する。まず、彼らは「直観は文化間で異なる」という仮説の検証の一環として、東アジア文化圏に属する人々と西洋文化圏に属する人々に対して実験を実施した。この実験の参加者は、全てラトガース大学の学部生であり、東アジア文化圏の参加者として、中国、韓国、日本からの移民第一、第二世代の23人の学生が文化的アイデンティティに関する試験を経て選ばれた。同様に、西洋文化圏の参加者として、66人の西洋系の学生が文化的アイデンティティに関する試験を経て選ばれた。この実験では、参加者は以下のような典型的ゲティアケースを提示される。

> ボブの友人ジルは、長年ビュイックを使用している。従って、ジルはアメリカ車を使用していると、ボブは思っている。しかし、ボブは意識していないが、ジルのビュイックは最近盗難にあい、ジルは代わりに、

---

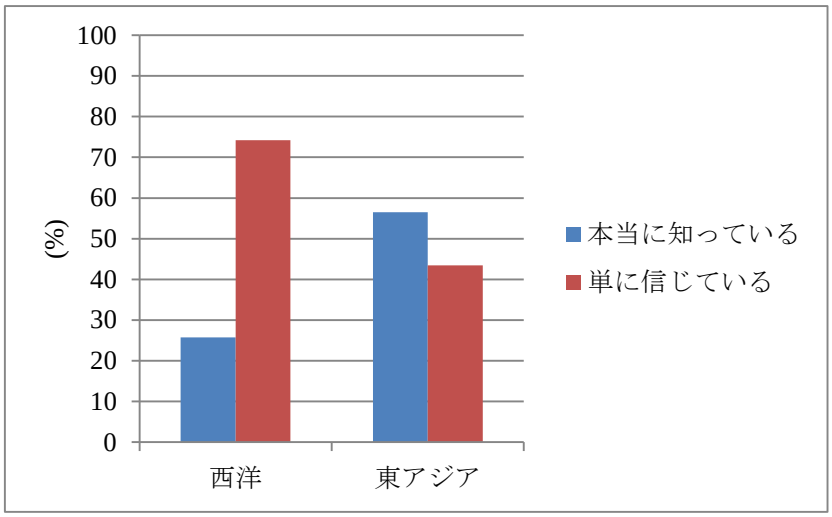
[31] この問題は実のところかなり古く、Ayer (1946: 106)がすでに指摘している。Cummins は続けて、もし理論が当の直観の真偽を判定できるとすれば、直観そのものに訴える必要がなく、結局直観の不必要性に帰着すると論ずる。Weinberg, Crowley, Gonnerman, Vandewalker & Swain (2012)は、Cummins の問題の設定を批判しつつ、新たにこの問題を設定し直し、可能な応答を詳細に議論している。

[32] 理論による汚染は Goldman & Pust (1998)で提起されたものだが、彼ら自身は直観を擁護していることもあり、容易く処理できると考えている（類似した問題は、Cummins (1998)によっても提起された）。Kornblith (2007)はこの問題を再び提起し、Goldman (2007)が応戦している。理論による汚染を検証するための実験は、筆者の知る限り存在しないが、Bartels (2008)は、義務論的な規則を受け入れている非哲学者は、個別事例に対してもその規則と合致した直観を持つという実験結果を報告している。ただし、彼は直観を熟慮と対比される感覚的なものしている点に注意が必要である。

[33] WNS の論文は *Philosophical Topics* の「Alvin Goldman の哲学」特集号に、Goldman の哲学への批判として掲載された。Goldman (2001)は、同号掲載の WNS の論文への応答である。

異なる種類のアメリカ車であるポンティアックを入手した。ジルがアメリカ車を使用しているとボブは本当に知っているのか、それとも単にそう信じているだけだろうか。

参加者は自らの直観にしたがって、ジルが「本当に知っているのか」それとも「単に信じている」だけなのかを、選択するように求められる。実験結果は、西洋文化圏の参加者のうち74％が、ボブは「単に信じている」という選択肢を選んだのに対し、東アジア圏の参加者の56％が「本当に知っている」という選択肢を選んだ、というものだった。さらに彼らは同様の実験をインド文化圏に属する参加者、インド、パキスタン、バングラデッシュ系の生徒に対しても行い、その61％が「本当に知っている」という選択肢を選んだという結果をえている。



文化圏	本当に知っている	単に信じている
西洋	17	49
東アジア	13	10

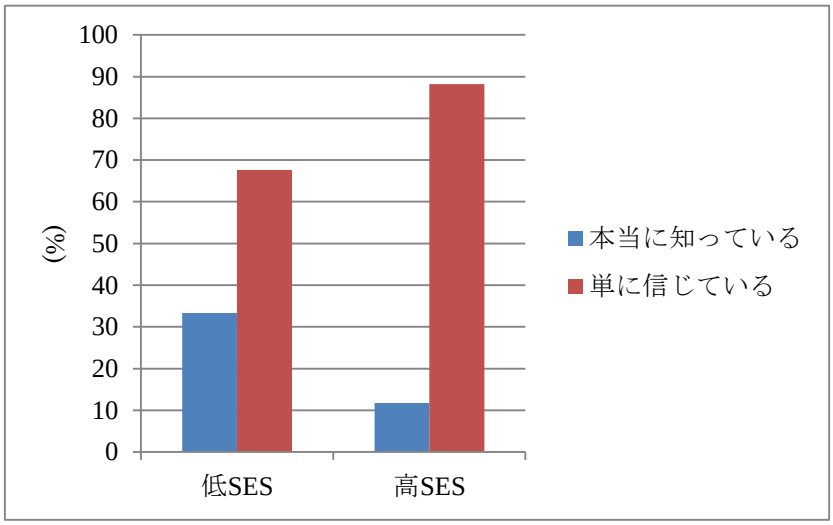
The Fisher p-exact = 0.006414

次に WNS は、「直観が同一の文化内でも、社会・経済的身分(SES)に応じて異なる」という仮説を検証するために、ニューブランズウィック、ニュージャージーのダウンタウンで、マクドナルドのギフト券と引き替えに成人を対象とする街頭調査を行った。調査の参加者のうち、大学に一度も通ったことがないと報告した24人は低 SES に属する層に、大学で一年以上過ごしたことがあると報告した34人は高 SES に属する層に分類される。これらの参加者は以下のような、Dretske の塗装されたラバケースの一種を提示される。

パットは彼の息子と動物園にいる。彼らがシマウマの檻までやって来たときに、パットはその中の動物を指さし、「あれはシマウマだ」と言う。パットは正しく、それはシマウマである。しかしながら、見物者た

ちの距離からして、パットは本物のシマウマと、シマウマに見えるように巧妙に塗装されたラバを見分けることはできないだろう。そして、もしこの動物が実際に巧妙に塗装されたラバであったとしても、パットは依然としてそれがシマウマだと思ってしまうはずである。パットはこの動物がシマウマであると本当に知っているのか、それとも単にそう信じているだけだろうか。

この実験でも参加者たちは、「本当に知っている」と「単に信じている」という二つの選択肢のどちらかを選択するように求められる。結果として、高 SES に属するとされた参加者の88パーセントが「単に信じている」を選んだのに対し、低 SES に属するとされた参加者の67パーセントしかこの選択肢を選ばなかった。



SES	本当に知っている	単に信じている
低 SES	8	16
高 SES	4	30

The Fisher p-exact = 0.038246

WNS の実験の影響のもとで、Machery, Mallon, Nichols & Stich (2004)（以下 MMNS）は、西洋と中国という異なる文化圏での固有名の指示に関する直観を調査するために統計的調査を実施した[34]。この実験の参加者は、40人のラトガース大学の学部生と42人の香港大学の学部生である。香港大学は英語で教育が行われ、全参加者が英語には堪能であるため、実験は両方とも英語で行われた。同時に実施された人口学的テストによって、9人のラトガース大学の参加者が西洋文化に属さないとして実験結果から排除され、同様に1人の香港大学の参加者が中国文化に属さないとして排除されている。参加者たちは、Kripke (1980)が固有名の記述説を批判するための意味論的論証の一部として用いたゲーデルケースと、

[34] この実験が言語哲学の伝統的方法論に対してどのような批判的意義を持つのかを、MMNS は Mallon, Machery, Nichols & Stich (2009)でも詳細に論じている。

それとほぼ同様でありながら、「ゲーデル」ではなく中国文化圏でより身近な別の名前を用いたケースの二つを提示される（これは、名前の親しみにくさが実験に影響する可能性に配慮したためである）。ここではゲーデルケースのみを記述しておく。

> ゲーデルは不完全性定理と呼ばれるある重要な数学の定理を証明した人物だと、ジョンは大学で習ったとしよう。ジョンは非常に数学が得意であり、彼は不完全性定理についての正確な説明を与えることができ、不完全性定理の発見をゲーデルのおかげだと考えている。しかし、これが彼がゲーデルについて習ったことの全てである。さて、ゲーデルは不完全性定理の証明者ではないとしよう。何年も前にその死体がウィーンで不自然な状況下で発見された、「シュミット」と呼ばれる男性が、実際にはこの偉業を行ったのである。彼の友人ゲーデルが何らかの手段で草稿を入手して、偉業の功績を主張したのであり、それ以後功績はゲーデルに帰されることになった。こうして、彼は不完全性定理を証明した人物として知られることになった。ゲーデルの名前を聞いたことのあるほとんどの人は、ジョンと変わらない。ゲーデルは不完全性定理を証明したということが、彼らがゲーデルについて聞いたことのある全てだと、彼らは言うのである。

参加者は、「ジョンが「ゲーデル」という名を使用する際に、彼は以下のどちらの人物について語っているのか」と質問され、「（A）算術の不完全性を実際に発見した人物」、「（B）草稿を入手し、偉業に対する功績を主張した人物」という二つの選択肢から回答を選ぶ。このうち指示の記述説と合致した回答（A）に0、指示の因果説と合致した回答（B）に1という値が与えられる（二つの事例があるので、参加者の回答は、0から2の値をとることになる）。結果は、2つの事例の回答の平均値が、ラトガース大学の参加者では1．13、香港大学の参加者では0．63と大きく異なるものだった（平均して、前者の57％が（B）と答えたのに対し、後者の32％しか（B）と答えなかった）。MMNS は、この結果を、西洋人の直観は指示の因果説を支持し、中国人の直観は記述説を支持するものだとまとめている（なお、彼らは Kripke のヨナケースに対しても同様の実験を行ったが、結果は文化間で異なるとは言えないものだった）。

文化圏	平均値（標準偏差）
西洋	1.13(0.88)
中国	0.63(0.84)

$t(70) = -2.55, P < 0.05, \chi^2(1, N = 72) = 6.023, P < 0.05$

他に実験的制限主義者によって行われた実験としては、Swain, Alexander & Weinberg (2007)（以下SAW）がある。これは、認識論で議論されてきた様々な事例を提示する順番によって、どのように知識に関する直観が変化するかを、200人以上の参加者とともに調査したものである。この実験では、それぞれの事例に対して「知っている」という意見に強く同意する場合は5、同意する場合は4、中立なら3、反対するなら2、強く反対するなら1という5つの選択肢が参加者に与えられるため、直観の強さも測定できるよう

に設計されている。実験の対象として選ばれたのは、Lehrer の人間温度計ケース――超自然の操作によって、知らないうちに周囲の温度を正確に測定できる能力を獲得した人物が、本人の自覚する何の証拠もなしに、温度に関する信念を形成するケース――である。最初に明確な知識の事例を提示して、その後に Lehrer の人間温度計ケースを提示した場合と、最初に明確に知識が成立していない事例を提示して、その後に人間温度計ケースを提示した場合では、参加者の回答に、前者の平均値が2．4、後者が3．2という相違する結果がえられた。人間温度計ケースは、通常知識が不成立である事例として扱われており、哲学者、非哲学者の直観も一般にそれを裏付けるものである（SAW は WNS が他の実験で使用したのと同じ人間温度計ケースの記述を採用しており、その WNS の実験では、程度は異なるものの、西洋、中国文化圏の両方で「単に信じている」を選んだ参加者の割合がかなり高い）。SAW によれば、事例を提示させる順番を前後しただけで、直観が平均値を超えて変化するという実験結果は、いかに直観が不安定なのかを示す証拠となる。しかしながら、彼らの実験は、特定の事例についての直観はある程度安定していることを示しており、例えば Ginet–Goldman のはりぼての納屋ケース――本物と全く変わらないように見える納屋のはりぼてが建ち並ぶ村にそれと知らずにたどり着いた人物が、たまたまその村にある唯一の本物の納屋を見て、「これは納屋である」という信念を持つ事例――は、提示される順序を変えても、参加者たちの直観は3．5から3．8の間でしか変化しなかった[35]。

4 実験的制限主義に対する応答

実験的制限主義者は、一般の人々の直観が、文化的背景、社会・経済的身分、事例の提示される順番といった、哲学的な分析、理論の真理とは無関係な、いわば偶然的なファクターによって変化するという仮説が、彼らの実験結果によって経験的に裏付けられたと主張する。これらの結果は同時に、伝統的方法論を用いる哲学者が共有していると思われる経験的想定、「自分たちの直観が典型的なものであり、それ故、それを他者に一般化することができる」(Jackson, 1998: 37)という想定の反証となると見なされる[36] [37]。

---

[35] 本稿では紹介できなかったが、実験的制限主義者は、ジェンダー間での直観の相違も直観の信頼不可能性に対する証拠として用いることがある。ジェンダー間の直観の相違を調査する諸実験は、Buckwalter & Stich (2013)で紹介、報告されている。しかしながら、これらの実験結果は、Adleberg, Thompson & Nahmias (2015)、Seyedsayamdost (2015a)の実験では再現されなかった。また、Nagel (2012)、Nagel, San Juan & Mar (2013a)、Wright (2010)は、彼女らの行った実験では、ジェンダー間で有意な直観の相違は確認されなかったと報告している。Buckwalter & Stich (2013)に対するフェミニズム哲学からの検討と批判は、Antony (2012)、Pohlhaus Jr (2015)、Schwartzman (2012)にある。

[36] Jackson のこの想定に対する実験的制限主義者の批判として、Stich & Weinberg (2001)がある。Jackson のこの論文への応答は Jackson (2001)に、実験的制限主義へのより最近の応答は Jackson (2011)にある。直観に基づくある種の概念分析として哲学を捉える場合、この想定は不可欠のものである。何故なら、Alexander & Weinberg (2007)が強調するように、もし哲学者たちが自分たちだけの概念を分析し、それが一般の人々の概念と異なるとすれば、哲学的理論は何ら一般性を持たないものになるからである。実験哲学の概念分析への重要性については、Balaguer (forthcoming)も参照のこと。

[37] ゲティアケースに関する英語圏の非哲学者と哲学者の直観が相違することを示そうとする実験として Starmans & Friedman (2012)がある。彼らの実験の含意とその批判は、本稿では十分に扱うことができないが、Nagel, San Juan & Mar (2013a, 2013b)と Starmans & Friedman (2013)の議論を参照のこと。また、5節で紹介する Turri (2013)は、この実験に対する部分的反証を意図したものであるが、Turri (forthcoming)ではその意義も認めている。

さらに、実験的制限主義者は、彼らの実験結果を一般化し、哲学的事例に対する直観一般がこのような偶然的ファクターによって左右される可能性を提起し、哲学者たちの直観が実際に信頼可能であることが示されなければ、直観の証拠としての妥当性は無効であると論ずるのである[38]。

この議論は伝統的な認識論的懐疑論に類似している。懐疑論者は、経験的信念の感覚証拠による正当化を無効化するために、感覚が誤った信念に導くような事例を幾つか指摘し、感覚が実際に信頼可能であることを示す挙証責任は反懐疑論者の側にあると論じる。同様に、実験的制限主義者も、今や哲学者たちの哲学的直観の信頼可能性に対する挙証責任は哲学者の側にあるとするのである。そして、この懐疑論は、（B2）調整問題――直観以外に直観の正しさを判定する方法がないという論点――と組み合わされることによって、さらに強固にされる[39]。以下では、この実験的制限主義の懐疑論に対する伝統派陣営からの応答とそれに対する再批判をまとめることにする。

まず、最も直接的な応答は、「実験哲学者たちの実験は、その実験設計の不適切さ故に、直観が偶然的なファクターによって変化するという仮説を裏付けるための証拠にはなりえない」というものである。例えば、Sosa (2009)は、WNS が実験参加者に与える選択肢は、必ず「本当に知っている」か「単に信じている」を選ばせるというものであるため、彼らが明確な直観を持たない場合でもどちらかを選ばざるをえないという点でうまく設計されているとは言えず、もし「本当に知っているか単に信じているだけかを判別するための十分な記述を与えられていない」という選択肢があれば、実験結果は一致したものになっていたのではないだろうかと示唆している[40]。さらに、Cullen (2012)は、WNS の実験では、選択肢の一つが、単純に「知っている」ではなく、「本当に知っている」と不自然に強い記述を与えられており、それが参加者がこの選択肢を避ける原因ではないのかと仮説を立て、それを裏付ける実験結果をえている[41]。

---

[38] 哲学者の非哲学者の直観を同時に調査する実験は幾つか行われている。Schwitzgebel & Cushman (2012)の実験では、哲学者と非哲学者の道徳的直観は同様に事例の提示される順序によって変化するという結果がえられ、Tobia, Buckwalter & Stich (2013)の実験では、哲学者と非哲学者の道徳的直観は、注42で述べる Sytsma & Livengood (2011)が指摘する認知的両義性に応じて、すなわち、事例を一人称で提示するか、三人称で提示するかに応じて変化するという結果がえられた（ただし、哲学者と非哲学者は変化の方向が逆転しており、両者の直観は異なっている）。また、Tobia, Chapman & Stich (2013)の実験では、清潔感を示唆する消毒剤の香りにより、哲学者と非哲学者の道徳的直観が同様に変化するという結果になった。さらに、Vaesen, Peterson & Van Bezooijen (2013)は、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語を話す哲学者に同一の実験を行い、彼らの直観が体系的に異なるという結果をえている。

[39] 実験的制限主義の行った実験から導かれる哲学的直観に対する懐疑論は、異なる論証を区別することによって、幾つかのタイプに分けることができる。本稿の論点は、これらの論証の相違に依拠しないため区別しないが、諸論証の分類には、Ichikawa (2014b)、Nado (2014c)、Sinnott-Armstrong (2006)を参照のこと（Sinnott-Armstrong の分類は倫理的直観に対する懐疑論に関するものであるが、哲学的直観一般に対する懐疑論の論証の分類としても理解可能である）。

[40] Bengson (2013)はこの路線の批判をさらに展開し、実験哲学者が行なってきたこれまでの実験結果からは、参加者の回答が彼らの直観を伝えるものだとは結論できないと論じる（同種の指摘は、Cohnitz & Haukioja (2015)でも行われている）。実験的制限主義の Bengson への応答は、Weinberg & Alexander (2014)にある。

[41] より詳しく述べると、Cullen は WNS と同様の選択肢を用いた場合と、「知っている」、「知ってはいない」という選択肢を用いた場合の両方で、WNS の実験を再現しようと試みた。実験はインターネットのアンケートサイトを通じて行われ、おそらく参加者のほとんどが英語の話者である。この実験において、WNS の選択肢では WNS の実験結果が再現されたのに対し、後者の選択肢では、57パーセントが「知ってはいない」を選択し、再現に失敗した。Cullen はここから、WNS の実験結果は、「実際に」という修飾語が「知っている」と判定するための基準を上げるのが原因であり、文化間の直観の相違を反映したものではないと推測する。Cullen は SAW の実験に対しても、事例の記述以外のファクターが直観の変化に影響しているという仮説を立て、それを検証する実験を行っている。

MMNS の実験設計に対しては特に批判が多い[42]。例えば、Deutsch (2009)、Ludwig (2007)は彼らの実験における「ジョンが「ゲーデル」という名を使用する際に、彼はどちらの人物ついて語っているのか」という設問は、「ジョンが「ゲーデル」という名で誰を指示しようと意図しているのか」という質問と、「その名がジョンの話す言語において誰を指示しているのか」という質問のうちのどちらを尋ねているのか、つまり話者の指示(speaker's reference)と、意味論的指示(semantic reference)のどちらを尋ねているのかという点で曖昧性があるとして、実験結果を疑問視する[43]。さらに、Martí (2009, 2012, 2014)は、この質問は、参加者がどのように固有名が使用されていると考えているのかというメタ言語的意見を聞くものであり、固有名が実際にどのように使用されるのかを明らかにするものではない、と論じている（彼女は後者を明らかにするような実験は設計可能であるとして、修正案を提案している）[44]。

---

[42] 本文で以下言及される Deutsch (2009)、Ludwig (2007)、Martí (2009, 2012, 2014)以外の批判としては、Andow (2014)、Cohnitz & Haukioja (2013)、Deutsch (2015a, 2015b)、Devitt (2011, 2012a)、Ichikawa, Maitra & Weatherson (2011)、Jackman (2009)、Martí (2015)、Ostertag (2013)などがあり、これらは MMNS の実験設計ないしその実験の哲学的意義を様々な形で疑問視するものである（MMNS に対する主な批判とそれらへの応答のサーヴェイとして、Genone (2012)、Hansen (forthcoming)、Machery & Stich (2012)、Sytsma & Livengood (2012)がある）。MMNS (2013)は、このうちの Devitt と Ichikawa et al.の批判に応答している。さらに、MMNS の実験の再現性に対しては、実験哲学の内部から二つの批判がある。

第一に、Barry (2010)は、MMNS の実験は英語を用いて実施されており、中国語を第一言語として用いる人々の直観を調査するものではないという事実を指摘する。そこで彼は、MMNS と同様の実験を広東語用いて再現可能かどうか実験した。その結果は、MMNS の実験結果は再現はできず、英語を第一言語とする人々よりも、広東語を第一言語として用いる人々のほうが指示の因果説と適合した回答を与える確率が有意に高いというものだった（ただし、これらの名前が現れる文の真理値を尋ねる質問には、両集団とも似た割合で指示の因果説と適合する回答を与えている）。しかしながら、MMNS を含む共同研究において、Machery, Deutsch, Mallon, Nichols, Sytsma & Stich (2010)は、Barry が実験に用いた事例は、MMNS の用いたゲーデルケースと細部で相違しており、MMNS の結論が反証されたかは定かではないと指摘する。彼らはゲーデルケースの翻訳を使用して広東語の話者に対する実験を行い、Barry の実験結果ではなく元の MMNS の結果に近い結果をえている。

第二に、Sytsma & Livengood (2011)は、MMNS の実験で用いられた質問には、彼らが認知的両義性(epistemic ambiguity)と呼ぶ、「確定記述の指示対象を決定する際に、誰の視点で考えるべきなのか（ジョンの視点をとるべきか、事例のナレーターの視点をとるべきか）が特定されていない」という曖昧さがあると指摘する。彼らはこの両義性が MMNS の実験における両集団の反応の相違に関係しているのではないかと仮説を立て、この仮説を検証するために4つの実験をピッツバーグ大学の学部生に対して実施した。そして、参加者の回答はどちらの視点をとるかによって左右され、その際の反応の違いが、MMNS の実験結果と類似しているという結果がえられた。この結果を受けて、認知的両義性を除去していない MMNS の実験はそもそも信頼できないため、文化間の直観の比較のために用いることはできず、また、両文化間の直観の相違は、この両義性を除去したならば再現できないのではないかと Sytsma & Livengood は主張する。

興味深いことに、Sytsma, Livengood, Sato & Oguchi (2015)が日本語の話者を対象に行った実験では、認知的両義性のどちらの視点をとるのかに関わらず、記述説を支持する選択肢を選ぶ割合が高いという MMNS の文化差に関する仮説を支持する結果がえられた（ただし割合は変動した）。筆者自身が行った実験（未刊行）でも、MMNS と同じ実験では日本人は記述説に沿う直観を持つ割合が高いという結果をえたが、この実験に際して、シナリオと質問を英語から日本語に直訳すると極めて不自然なものになることが分かったため、日本での実験結果は他の実験結果と簡単に比較することができないと感じている。この点については追加実験を行い、別の場所で詳しく論じる予定である。

[43] Machery, Deutsch & Sytsma (2015)は Deutsch、Ludwig の批判を経験的に検証するため、MMNS の質問を、「ジョンが「ゲーデル」という名を使用する際に、彼が誰について語ろうと意図しているかとは無関係に、彼は実際にどちらの人物について語っているのか」という質問に置き換えた上で、元の選択肢である「（A）算術の不完全性を実際に発見した人物」、「（B）草稿を入手し、偉業に対する功績を主張した人物」から回答を選ばせるという実験を実施した。その結果、59パーセントの英語文化圏に属する人が（B）を選ぶ一方で、中国文化に属する人の39パーセントしか（B）を選ばず、質問は意味論的指示に関わると明確にしたとしても、MMNS の実験結果が再現された。また、Machery (2014)は Deutsch (2009)の他の論点に対する応答を含んでいる。

[44] MMNS の一人、Machery は共著論文(Machery, Olivola & De Blanc, 2009)で新たな実験を実施し、その結果から

こうした実験設計への批判は、あくまでも個々の実験に対して向けられるものであり、実験的制限主義の哲学的直観に対する一般的な懐疑論に応戦するものではない。そうした応戦としては、主に、（C1）直観の一般的信頼性の擁護、（C2）実験参加者の概念把握の問題視、（C3）表面的直観(surface intuition)と堅固な直観(robust intuition)の区別、（C4）専門的技能による哲学者の直観の信頼性の擁護、という4つの方向性がある。

（C1）直観の一般的信頼性の擁護

先に述べたように、直観の認識論は知覚のそれをモデルにして考えられている。したがって、実験的制限主義の直観に対する懐疑論と同種の懐疑論は、知覚に対しても生じることになるはずである。しかし、知覚に対する懐疑論は到底正しいと思われない。このことは、実験的制限主義の懐疑論の論証に何か問題があることを示している。

Goldman (2007: 4–5)、Sosa (2007b, 234)、Williamson (2004: 150–2, 2007b: 191–3)によれば、実験的制限主義の懐疑論ならびに調整問題の前提が誤っているのは、以下の点である。まず、知覚は不可謬でないにせよ、一般に信頼性が高く、その信頼可能性は、個々の事例における知覚の信頼性を否定するための事実（例えば、照明が十分ではないとか、対象があまりにも遠くにあるといった事実）が与えられない限り、何ら問題なく受け入れられている。それ故、個々の事例において知覚が証拠として機能するために、あらかじめ知覚が信頼可能性だということを示す必要はない（ただし、これを否定する認識論者もいる）。同様に、直観がときに誤りうるとしても、そのことは直観の一般的信頼可能性を損なうものではない。それ故、哲学的理論の正当化に哲学的直観を使用するたびにその信頼性をあらかじめ示す必要はない。また、調整問題は直観だけでなく知覚や内観といった基礎的な認知能力にも生じるが、この事実はそれらの一般的信頼可能性を損なうものではなく、知覚や内観の証拠としての妥当性を否定する根拠にはならない[45]。

この路線での直観の擁護に対し、実験的制限主義者は、自分たちの懐疑論は他の能力への拡張を許容するようなものではなく、むしろ極めて限定的なものであり、「謎めいていて(esoteric)、通常ではなく、ありそうにない、あるいは一般的に言って突飛な」(Weinberg 2007: 321)仮想的事例に対する哲学的直観のみを問題にしているのだと応戦している。実験的制限主義者による実験の結果がそうした直観の信頼性を疑問視するに足るものである以上、伝統的哲学者の側に信頼可能性を立証する必要があるとするのである。また Weinberg (2007)、Weinberg, Alexander, Gonnerman & Reuter (2012)、Weinberg, Gonnerman, Cameron & Alexander (2010)は、我々は知覚がどのような場合に誤るのかについて多くを知っており、そ

Martí (2009)の批判は妥当ではないと論じている。彼は、Martí (2012, 2014)にも Machery (2014)でさらに応戦している。しかし、Cohnitz & Haukioja (2013)は、Martí の論点の理論的な補強となりうる指示の理論についての方法論的な考察を提示している。

[45] Hales (2012)は、直観と知覚の類似性を擁護した上で、WNS が哲学的直観の文化間での相違を裏付けるために参照する両文化圏での行動、思考パターンの体系的相違に関するデータは、同時に知覚の文化間の相違を示すものであると指摘し、この路線の批判を WNS が回避することはできないと論じる。また、Nagel (2012)も、自らの実験結果を含む多くの心理学的証拠に依拠しつつ、同様の路線の批判を行っている。Stich (2013)は Nagel (2012)に対する実験的制限主義からの応答であるが、Nagel (2013)はそれにさらに応戦している。

の知識を用いて知覚能力を調整できるのに対し、哲学的直観に対してはほとんどそのような知識を持っていないと指摘する。もし批判者たちが依拠する直観と知覚のアナロジーが成立せず、他にアナロジーを見出すことができる適切な能力が見いだせないならば、直観に対する調整問題は依然として残り続けることになる[46] [47]。

(C2)実験参加者の概念把握の問題視

Bealer (1998a, 1998b, 1998c, 1999, 2008)、Kauppinen (2007)は、人々がある概念を完全に把握したならば、その概念についての直観は理想的状況下ではほとんど一致するはずだと考える。彼らの見解によれば、複数の参加者の直観が一致しない場合、一部の参加者の概念の内実についての理解が不足しているか、異なる概念を用いている可能性が高い。また、Goldman (2001)、Sosa (2007b, 2009, 2010)も、異なる文化間で知識に対する直観が大きく相違するという WNS の実験結果が示すのは、それぞれの文化の成員が「知識」ということで異なる事柄を意味していることだと考えている[48]。また、実験的分析主義者たちの幾人かも、同一の文化内に直観の多様性が存在する場合、それが概念の多義性や曖昧性に由来すると考えることが自然だとし、その多義性を解明しようと試みている[49]。もしこの路線の批判が正しいとすれば、

---

[46] Mizrahi (2014, 2015a)は、知覚は学習によって変化することがまれであるため、知覚と直観のアナロジーは成立しないと論じる。ここから彼は、このアナロジーに訴えることは、以下(C4)で述べる専門的訓練によって獲得された哲学者の直観の信頼性に基づく実験的制限主義への応答と整合しないと指摘する。しかし、Williamson (forthcoming)のように、(C1)の路線の応答を、知覚ではなく他の種類の信頼可能な能力とのアナロジーに訴えることで行うことは可能である。また、注79で述べるように、専門的技能は直観の信頼性そのものに関わると考える必要はない。

[47] Williamson (2011, forthcoming)は、実験的制限主義者が想定するような仕方で問題のある直観(判断)だけを切り分けることはできないと、この路線の応答を再批判する。Weinberg (2007)の提示する論証は、実験的制限主義者による直観に対する懐疑論の論証としては最も詳細かつ丹念なものであるが、すでに批判として、Andow (2015a)、Brown (2013)、Grundmann (2010)、Ichikawa (2012)、Szmuc (2012)などがある。また、本稿が以下展開する実験的制限主義に対する批判は、ある程度 Weinberg の論証に対しても有効である。Weinberg の論証を、直観の切り分けによってではなく、哲学的理論の体系性に訴えることで再構成し、擁護しようという試みは、Nado (2015)にある。この点を詳述はしないが、Nado の試みが成功するかは、哲学的理論の体系性がどのようなものかに依存する。

[48] Stich (1988, 1990, 2009)は、認知的概念、規範の文化相対性が存在するならば、それは依然として概念分析としての分析的認識論にとって重大な問題になると一貫して主張している。これは Stich が分析的認識論を、単にある文化における認知的規範、規則を定めるだけではなく、超文化的にどの認知的規則が正しいのかを決定するという規範的使命を担っていると考えているからである。概念分析がある特定の文化内での規則を取り出すだけならば、何故その規則が他文化の規則に比べて優位なのかという点が説明できず、この超文化的使命は遂行されえない、というのが彼の批判の要点である。WNS の論文はそもそも、Stich のこの主張を経験的にサポートするものとして書かれている。しかし、このような規範的プロジェクトに従事している認識論者は、現在の分析的認識論ではほとんど見あたらず、Sosa (2009)が指摘するように、この批判は現在の分析的認識論にはほとんど当てはまらない。Stich (2009)は Sosa に対して反論しているが、ほとんど従来の主張の繰り返しに終始している(Sosa (2010)は、それへの再応答である)。また、(英語圏での)認知的規範の問題は、近年の認識論では「知識の価値」を主題としてさかんに論じられるが、ほとんどの論者が、Stich が批判するような概念分析に依拠してはいない。むしろ、知識が認知的実践で果たす役割が分析の対象となっている。それ故、筆者は Stich の分析的認識論に関する見解にほとんど同意できない(ただし、この点を立証するには、分析的認識論の実際の研究方法に関するより詳細な調査が必要である)。Stich の認識論理解への批判として、他には Ichikawa (2014b)がある。

[49] Nichols & Ulatowski (2007)は、Knobe (2003a, 2006)の再現実験を行いつつ、これらの実験でえられた相違する結果は、意図的に行為するという概念の多義性に由来すると結論する。この論文に対して、実験哲学の内部から Machery (2008)が批判を行なっている。批判の要点は、直観の相違が概念の相違を反映しているとするためには、どの直観がある概念を構成し、どれがそうでないのかを決定する必要があるが、それはできそうにないという Quine 由来の意味・概念の全体論に依拠するものである(Iijima & Ota (2014)は、直観に関する心理学的前提から概念に関する結論を

実験参加者たちの示す直観の多様性、不安定性は、単に異なる概念が使用されているという事実を反映しているに過ぎず、同一の事柄に対する直観の信頼不可能性や不安定性を示すものとは言えなくなる。

この路線での実験制限主義批判に対しては、まず、実験哲学者の実験はある程度この問題を意識して設計されている、と指摘できる。例えば WNS も、最初に知識が成立していることが（彼らにとって）明確な事例と成立していないことが明確な事例を提示し、西洋と東アジア文化の成員間で一致する結果をえており、それをもって両者が同一の概念を使用している証拠となると主張している。さらに、Alexander & Weinberg (2007)は、この擁護が「哲学者たちは完全な概念理解によって正しい直観に到達しており、普通の人々はそうではない」と言っているのだとすれば、それは「直観の経験的調査は哲学に対するいかなる意義も持たない」と言っているに等しく、概念の経験的探求に対するあまりにも極端な批判につながると指摘する。彼らはさらに、一般の人と哲学者が異なる概念を用いているとする理由が明瞭ではないと述べ、その理由が哲学者のみが完全な概念理解を持っているからだとすれば、何故そうなのかが説明されなければならないと論じている[50] [51]。

（C3）表面的直観と堅固な直観の区別

すでに述べたように、直観は信頼可能であるものの不可謬ではなく、理想的でない状況で生じた場合には誤ることがありうる。多くの論者は、実験参加者が与えられたケースについて判断を行うのに十分な正しい背景的情報を持ち、事例の記述を完全に理解し、またそれについて十分な反省を行うといったことが、状況が理想的であるための条件である、と考える[52]。こうした理想的条件下で生じる直観は安定性を持つ「堅固な直観」であるとされ、理想的ではない条件下で生じ、そのため状況を改善することによって変化する「表面的な直観」と区別される。伝統的哲学の方法論の擁護者たちはこの区別を行った上で、実験的制限主義者が行った実験の参加者たちが理想的な状況下で直観を形成したかどうかは定かではな

導くには、合理性に関する想定が必要になると指摘している。全体論からの批判は、分析性が認識論的に理解されるならば、合理性に関わる想定を導入してもまだ不十分だというさらに強力なものになる）。概念分析としての哲学一般に対して、この路線の批判は確かに強力であり、実験的分析が概念分析としての哲学という哲学観を維持するならば、強力な批判となる（この種の批判は実験哲学の運動とは全く独立に展開されてきたのであり、近年でも、実験的制限主義に批判的な Williamson (2007b)が、伝統的哲学の哲学観に対し同種の批判を展開している）。もちろん、全体論を採用することが即座に概念の多義性やその否定を含意するわけではなく、全体論を採用したとしても、この路線の批判を回避できるかもしれない。しかしながら、Knobe や Nichols & Ulatowski の実験は同一文化圏内の直観を調査するものだが、WNS の多くの実験は二つの文化間での直観の相違を調査することを意図したものである。そして、WNS 自身が結論の裏付けとして挙げている根拠として、彼らの実験で見られた直観の相違は、両文化圏の行動、思考パターンの体系的相違に一致していると推測している。この推測が正しければ、両文化圏が異なる概念を用いているということが、全体論から見ても自然だと思われる。

[50] Feltz (2008)も同様の路線で議論を展開し、概念についての完全な理解を持っているために哲学者の直観は正しいと想定することは、実験的制限主義に対して論点先取になると指摘する。

[51] Spicer (2010)によれば、直観の形成には、概念（より正確には、彼が民間理論と呼ぶ、性質、関係の成立、不成立に関する原理の内的な表象）とその適用のためのヒューリスティクスの両者が関与しており、WNS の実験結果は、概念ではなく、ヒューリスティクスのみが異文化間で異なるという仮説と整合的であるとする。Spicer はまた、ヒューリスティクスが同一文化圏の個人間でも異なる可能性も示唆している。これが正しければ、（C2）の擁護者も実験哲学者も、直観に関する実験から即座に概念に関する含意を引き出している点で、ともに誤っていることになる。

[52] 直観がどのような条件下で誤りに導くのかを Bealer (2008)はより細かく分析し、（a）認知的欠損、（b）混乱、（c）誤った理解、（d）不十分な記述と文脈依存性、（e）理論負荷性という五つの条件を挙げている。

く、彼らの選んだ選択肢は単に表面的直観の報告である可能性が高いと反論する。この反論が正しいならば、統計的調査が明らかにする直観の相違は、単に表面的な相違に過ぎず、比較された集団が実質的に異なる直観を持つという結論を導くには不十分である。Kauppinen (2007)、Ludwig (2007)は、こうした指摘を行った上で、参加者に十分な情報を与え事例を正しく理解させるためにはソクラテス的対話を彼らと行う以外にないと論じ、統計的調査という方法の不適切さを主張する[53] [54]。

この路線の直観の擁護に対して、WNS と Alexander & Weinberg (2007)、Weinberg & Alexander (2014)は、十分な反省を行うことが正しい直観を生み出すという見解には、何の経験的裏付けもないと反論する[55]。また、Weinberg (2007)は、十分な理解、反省とされるものが、何らかの理論を習得することと区別されないならば、(B3)理論による汚染からの直観批判を避けることは難しいと反論する。さらに、Liao (2008)、Nadelhoffer & Nahmias (2007)は、実験参加者全員が理想的な条件を満たさず、堅固な直観を持っていないと言うことはあまりも極端であるとする。実験哲学者である Nadelhoffer & Nahmias によれば、この路線の擁護者が重視する理解や背景的情報に関する参加者間の相違は、サンプルサイズを拡大し、フェアなサンプリングを行うといった実験設計の改善によってある程度解消しうるものであり、また参加者が何故当の選択肢を選んだのかに関する記述を求めることによって、どのように参加者が事例を理解したのかも確かめることもできる。したがって、表面的な直観と堅固な直観の相違に訴えることは、実験哲学が用いる統計調査という方法論の不適切さを確立するには十分ではない。

(C4)専門的技能による哲学者の直観の信頼性の擁護

Devitt (2011, 2012a, 2015)、Hales (2006, ch. 4)、Horvath (2010)、Ludwig (2007, 2010)、Williamson (2004,

---

[53] 堅固な直観と表面的直観の区別は Kauppinen (2007)に由来する。Liao (2008)も、Kauppinen を部分的に批判しながらも、ある程度類似の区別を行っている。さらに、提示されたケースに関する直観とそれへの言葉だけの反応(Sosa 2007b)、直観と直観の報告(Ludwig 2007)などの区別も存在するが、これらの相違は本稿の論点にとっては重要でないため、考慮しないことにする(ただし、これらの論者が、哲学的直観ないし堅固な直観に関するあらゆる見解を共有しているわけではない。例えば、Ludwig (2007, 2010, 2014)は、堅固な直観は真であるという直観の事実性(factivity)を肯定するが、彼以外の同意者を見出すのは難しい。また、Sosa (2013, 2014)は、堅固な直観に相当すると思われる正当化を与える直観を、理解とそれを構成する知的能力のみに基づく直観としている)。これらの哲学者の幾人かが自覚しているように、この区別は、Chomsky (1965, ch. 1, 1968/2006, ch. 6)による能力と遂行の区別(competence-performance distinction)に類比的である。すなわち、意味論的能力とその実地での遂行を区別し、後者が前者を反映しないケースを、単に遂行上の誤り(performance error)として排除する、というのがこの区別の狙いである。しかし、Chomsky の区別は文法に関するものであり、どこまでこれらの区別が類似または相違するのかは、簡単には判断できない。この区別に対する実験哲学者の見解として、Knobe (2010)とそれへの応答である Alexander, Mallon & Weinberg (2010b)も参照のこと。

[54] もちろん、こうした対話による哲学というプラトン由来の方法論は、一人称的な視点で行われるデカルト以来の伝統的哲学では、内省による自己反省、対話という形をとる。

[55] Weinberg, Alexander, Gonnerman & Reuter (2012)は、表層的直観と堅固な直観の相違を調べるために、別個の参加者集団がこれらの異なる直観を用いて、SAW のものと同様の課題に答えるという実験を設計、実施した。表層的な直観に関する結果は SAW の結果を再現するものだったが、堅固な直観に関しては、全く逆に、明確な知識の事例の後に人間温度計ケースを提示した場合の方が、明確に知識が成立していない事例の後に人間温度計ケースを提示した場合よりも、「知っている」に強く同意するものが多かった。彼らはこの結果から、堅固な直観は制限主義への批判者が述べるように一般に信頼可能なものではなく、その(非)信頼性は経験的に調査する以外にない、と論じる。彼らは堅固な直観を単に反省の上での判断と同一視しているため、(C3)への反論としては妥当ではないと応答できるように思われるが、この種の応答の問題点は、Weinberg & Alexander (2014)で論じられている。

2007b, ch. 5 &6, 2011b)といった論者は、哲学者はある種の専門的技能(skill, expertise)を持つことで、非哲学者よりも信頼可能な直観や判断を仮想的事例に対して持つことができるとする。そうした技能とは、Ludwig によれば、概念の適用条件を正しく理解し、「事例の適切な特徴と反応すべき事柄に定位した［事例に関する問いへの］回答を与える」(Ludwig 2007: 150)ための技能であり、Williamson によれば、日常的な認知的技能の一部である、「事例の記述の詳細とそうした詳細の当該の問題への潜在的な関連性に慎重に注意を向けるための技能」(Williamson 2011b: 216)である。Ludwig、Williamson は、こうした技能は仮想的事例についての思考実験を行う伝統的哲学を遂行するために不可欠なものだとする。哲学者たちは長年の哲学的研鑽によって、そうした技能を習得するのであり、それ故、哲学者の直観は非哲学者の直観よりも信頼可能である（この点はまた、Ludwig の（C3）の路線での擁護を補強している）。

この路線の直観の擁護に対する応答として、哲学的技能なるもの、例えば、論理的思考や論証、哲学的分析に関わる技能の存在を認めたとしても、そもそもそれが直観の信頼性とどのように関係するのかが明確ではない、と実験的制限主義者は述べる。彼らによれば、技能に由来する優位性が存在するというのは経験的な仮説であり、経験的調査をすることなしに無批判に仮定されるべきではないのである[56] [57]。

5 実験的制限主義に対する応答

最後に、実験的制限主義の哲学的直観に対する懐疑論がどの程度説得的なものなのかという点に関して、前節を踏まえつつ筆者の見解を述べておきたい。まず指摘できることは、これまで行われた実験から実験的制限主義の提唱する懐疑論を導出するためには、二つの異なる一般化が必要になるということである。実験的制限主義者によれば、これらの実験結果は、特定の事例についての非哲学者の哲学的直観が不安定ないし信頼不可能であることを示している。この実験結果の分析をそのまま受け入れたとしても、このことから（C1）直観の一般的信頼性の擁護に対する反論で述べられたような、非現実的で突飛な哲学的仮想事例についての哲学的直観に対する不安定性、信頼不可能性を導出するためには、以下の二点が示される必要がある。すなわち、（1）この実験結果が人工的で突飛な事例に関する哲学的直観に一般化可能であること、そして、（2）この実験結果が、哲学者の哲学的直観に一般化可能であること、の二点である。筆者の考えでは、この二つの一般化は、どちらも何らかの議論なしには受け入れられるものではない。以下では、これらを順に取り上げ、それぞれの一般化の問題点を指摘したい。

最初に、「（1）非現実的で突飛な事例に関する哲学的直観への実験結果の一般化」を取り上げる。（C1）直観の一般的信頼性に訴える伝統的方法論の擁護への反論で示されているように、実験的制限主義

[56] この再批判は、Weinberg, Gonnerman, Cameron & Alexander (2010)で展開されている。（C4）を巡る議論として、Williamson (2007b)へのコメントである Weinberg (2009)、そしてそれへの応答としての Williamson (2009)も参照のこと。また、他の実験哲学者からの Williamson (2007b)への批判として Alexander (2010)がある。

[57] （C4）の路線の直観の擁護とは独立に、哲学教育がどのような認知的技能の習得につながるのかという問いは、非常に興味深いものである。Livengood, Sytsma, Feltz, Scheines & Machery (2010)は、4472人に対して「認知的反省テスト」と呼ばれる調査を実施し、何らかの哲学教育を受けた経験を持つ人は、同程度の教育を受けたが、哲学教育を受けた経験のない人々よりも、より慎重で、反省的であるという結果をえた。ただし、Livengood らは、この結果が哲学教育の産物であると即断することは慎重に避けている。

者自身も彼らの実験結果に対する過度の一般化には慎重である。彼らは、実験的制限主義の意図する懐疑論は、哲学的直観一般についてのものではなく、非現実的で突飛な哲学的仮想事例に対する哲学的直観に関するものだとしている。しかし、このように弱い形で理解された実験的制限主義の懐疑論でさえ、彼らの実験結果がそれを本当に支持するのかどうかは明らかではない。「謎めいていて(esoteric)、通常ではなく、ありそうにない、あるいは一般的に言って突飛な」仮想的事例として Weinberg (2007)が挙げるのは、Davidson のスワンプマンケース、Searle の中国語の部屋ケース、Descartes 由来の欺く神のケースなどの極めて非現実的で人工的な事例ばかりである。実験的制限主義者は、彼らが実験に用いたより卑近で身近に起こりうるアメリカ車に関するゲティアケース、塗装されたラバケースといった事例に対する直観が多様かつ不安定であることから、これらのより人工的な事例に対する直観はより以上の多様性ないし不安定性を示すはずだと想定しているように思われる[58]。

この想定は、より簡略に言えば、「哲学的事例の人工性（非現実性、不自然性）の度合いと、それに対する直観の不安定性ないし信頼不可能性は比例する」というものである。この想定こそ（1）の一般化の根拠であり、この想定なしに実験的制限主義者の懐疑論は成立しない。この想定が不可欠であることは、以下のように示すことができる。まず、Liao (2008)が指するように、WNS の実験でも、SAW の実験でも、実験参加者の概念把握の確認に使用された明確な事例に関する直観はおおむね一致しているという結果がえられている。Liao は、実験的哲学者の懐疑論を仮想的事例一般に対するものと見なした上で、この結果は幾つかの仮想的事例の結果が信頼可能であると告げており、実験的制限主義者の仮想的事例一般に対する極端な懐疑論を否定するものである、と論じる。実験的制限主義者は、Weinberg のように、これらの明確な事例は実験的制限主義者の懐疑論の対象ではない、と言わなければならない。その根拠としては、これらの事例がより現実的で、人工的要素を含まないということしかありえない。したがって、事例の人工性の度合いと直観の多様性、不安定性が比例するという先の想定は、実験的制限主義者の懐疑論が成立するために不可欠のものなのである。

この想定は経験的なものであるが、それを経験的に正当化する証拠はほとんど存在しないばかりか、反証する証拠も存在する。また、この想定は、事例の卑近性の度合いを基準に、それぞれの事例に関する哲学的直観を認識論的に、すなわち安定したものや信頼可能なものへと分類できるということに等しい。しかしながら、これは哲学的直観を認識論的に分類する唯一の方法というわけではなく、よりきめ細かい分類を行うべき理由がある。以下、これらの論点をより詳しく説明する。

まず、実験的制限主義による懐疑論の成立に不可欠な「哲学的事例の人工性の度合いと、それに対す

[58] Jeremy Fantl が筆者との議論の中で示唆した意見によれば、これらの事例は単に人工的なだけではなく、より複雑なものであり、Weinberg の想定は、彼が複雑さに言及しないにせよ、事例の複雑さと直観の信頼可能性、安定性が反比例するという想定であると考える方が適切であるかもしれない。例えば、異星人が何らかの操作を行って、信念が偶然真になるケースのようなゲティアケースを作ることはできる。このケースは他のゲティアケースに比べて、異星人の存在に訴えるという点でより人工的で、卑近さで劣るが、このケースについての直観は、全く他のケースの直観と比べて不安定であるようには思えないというのが、彼の根拠である。筆者は彼の意見とそれを支える直観に同意するが、事例が複雑になるということは、その事例がより多くの潜在的ファクターを含んでいるということであり、その事例の理解の多様性、文脈依存性の可能性がより高くなることを意味する。それ故、この意見が正しければ、筆者が以下で述べる論点はより強力なものになるはずである。

る直観の不安定性ないし信頼不可能性は比例する」という経験的想定の根拠は、貧弱なものである。実験的制限主義者はこの想定に対する経験的根拠を提出していない。たとえ彼らの実験結果を受け入れたとしても、それはせいぜい個々の事例に関する直観の多様性、不安定性を示すだけであり、それらがこの想定に沿う形で一般化可能であるということを示すには不十分である。さらに、この人工性の度合いというものをどのように測定するのかも、全く明らかではない。Williamson (2005, 2007b, ch. 6)は、WNS のアメリカ車のケースのような単純なゲティアケースは、現実に十分起こりうるものであり、そうした事例を問題視する根拠は何もないと主張する。こうしたケースが人工的とされるべき理由を、実験的制限主義は提出しなければならない[59]。

極端な制限主義者は、アメリカ車のような現実性の高い事例に関する直観に対しても、それが哲学的な事例であるという理由で、その安定性や信頼性に対する経験的正当化を要求するかもしれない。しかしながら、（C1）直観の一般的信頼性の擁護で述べられたように、実験的制限主義者が、人工性という規準で、証拠として使用されうる直観の範囲を制限するのは、伝統的哲学への制限主義の批判が、哲学的直観一般に対する懐疑論に陥ることを避けるためである。こうした制限なしでは、哲学的分析、理論はいかなる直観によっても正当化されないという、哲学的直観一般に対する懐疑論と制限主義を区別することは困難になる。またさらに、哲学的直観だけでなく、数学的、論理的直観といった他の種類の直観や知覚による、いかなる主張の正当化も許容すべきでないといった極端な懐疑論に陥る危険性も増すことになる。

WNS の実験結果は、そこで用いられたゲティアケースに関する信頼性を疑わせるに十分だと考えられるかもしれない。しかし、（C2）実験参加者の概念把握の問題視で指摘されたように、彼らの実験結果が正しいと仮定しても、特定のゲティアケースに関する直観の異文化間での相違は、知識概念ないし知識についての考え方の相違と考えることが最も自然であるように思われる[60]。結局のところ、このケースが西洋文化圏内でも問題視されるべき事例であるとする理由は、提示されていないのである。さらに、WNS の実験結果を否定するような、幾つかのゲティアケースに関する直観の安定性・信頼可能性を、実験哲学の成果から導くことさえできる。WNS のアメリカ車のケースと SAW のはりぼての納屋ケースは、両者とも正当化された真なる信念が知識ではないという理由で古典的知識分析の反例となるケースであり、通常両者はともにゲティアケースに分類される。WNS と SAW の実験結果は、少なくとも西洋文化圏の人々の彼らが調査した二つのケースに対する直観は安定している、ということを示している。また、実のところ、彼らの実験結果を直接否定するような実験結果も存在する。Kim & Yuan (2015)、Nagel (2012)、Seyedsayamdost (2015b)、Turri (2013)、Wright (2010, 2013)など、ゲティアケースに関する実験は多く行わ

[59] Cappelen (2012: 225–7)は、Weinberg (2007)の議論にこの想定に近い想定を読み込んだ上で、人工性の度合いと判断の困難さが釣り合わない事例があると指摘する。この Cappelen の指摘に対し、Weinberg (2015: 184–5)は、この想定は厳密なものではないにせよ心理学的な一般化としてはもっともらしいと反論している。ここで重要なことは、Weinberg がこの想定を明確に認め、またそれが経験的な仮説であることも認めている点である。

[60] しかし、こうした概念の相違、多義性に訴えることが他の事例でも可能かどうかは、事例ごとに検討されるべき問題である。筆者は直観の多様性がつねに参加者の概念理解の完全さの相違に由来するという見解には同意できない。そもそもいつ概念を完全に把握したと言えるのかということが、極めて曖昧であり、その条件を特定することはほとんど不可能に思えるからである。Williamson (2007b, ch. 4)は、意味の外在主義と全体論は、概念理解の条件を厳密に特定することは不可能であることを含意すると説得的に論じている。

れており、ほとんどの実験で、少なくとも単純なゲティアケースに関する直観は、同一文化内であれ、異なる文化間であれ安定しているという結果がえられている[61]。すなわち、WNS と SAW の実験結果が再現できなかったという結果がえられたわけである。背景の異なる集団間に直観の相違がないと立証することは、それがあると立証することよりもはるかに難しいとしても、これだけでも（1）の一般化の強さを疑問視する十分な根拠にはなる[62]。もちろん、実験的制限主義はこれらのケースは人工的ではないと認めることはできる。しかしその場合、どのようなケースを人工的であるとすべきなのかに関する、相当に明確な規準を設定しなければならない。しかしながら、こうした規準設定は、さらに実験を重ね、どのケースに関する直観が安定しているかを調べることでしか与えられないはずである。したがって、実験的制限主義が一部の哲学的直観への懐疑論の前提である（1）を維持することは、今のままでは極めて難しい[63]。

これらの難点に加え、人工性の度合いによる直観の認識論的分類は極めて大雑把なものでしかなく、よりきめ細かな分類を行うべきだとする理由がある[64]。アメリカ車のケースとはりぼての納屋ケースは、古典的知識の定義の反例となるという点でゲティアケースであると先に述べた。しかし、このことから、両者が認識論的に同様に分類されるべきだということは、容易く導くことができない。まず、この二つのケースでは、何故信念が正当化されているのか、ないし何故知識が成立していないのかという理由が異なっており、ゲティアケースの実例であるという以外の点ではかなりの相違がある[65]。そして、こうした各ケースの細部の相違が、それぞれの事例に関する実験参加者の理解とそれを反映した直観の信頼性に影響を及ぼす、と考えることは自然だからである[66]。

---

[61] Boyd & Nagel (2014)は、直観の信頼可能性を示す多くの実験についてのサーヴェイを含んでいる。この論文に対し、Weinberg & Alexander (2014)は、Weinberg (2007)を敷衍しつつ、実験的制限主義が問題にする「信頼性」の意味を偶然的なファクターに反応していないという意味であると規定し、どのような条件下で直観がこの意味で信頼可能であり、どのような状況下で信頼可能ではないのかを哲学者が知らないことが、哲学における直観の使用の問題点であると応戦する（この点については、Weinberg (2015)も参考のこと）。この理解によれば、実験的制限主義者が問題にしているのは、直観がある事例においては偶然的なファクターによって左右されてしまうという狭い意味での直観の信頼不可能性に加え、どの条件下で信頼可能なのかについての直観に関する（二階の）正当化の欠如である。本稿では「信頼性」の意味を詳細に特定していないが、Weinberg & Alexander の主張を認めたとしても、本節の実験的制限主義批判はある程度成立する。また、注47で挙げられたように、Weinberg (2007)への批判はすでに多く存在する。

[62] こうした実験結果を受けて、Stich & Tobia (forthcoming)の実験的制限主義の動機付けは、極めて弱められた形になっている。

[63] Sosa (2011)も同種の疑念を表明している。

[64] 以下展開する理由に加え、「直観」とは多くの異質な心的状態の総称であり、互いに共通性をほとんど持たないという Nado (2013)の見解も、彼女自身が論じているように、この主張を支持する理由となりうる。

[65] 何故両者が異なる種類に属するのかという点に関しては、主に三つの異なる（しかし、両立可能な）説明がある。第一に、Lycan (2006)に代表される、アメリカ車のケースは、認識主体が信念に対する証拠を持っていることによって正当化されるが、その正当化に関連する信念——このケースでは、ジルはビュイックを使用しているという信念——が偽であるというケースであり、他方、はりぼての納屋ケースは、信念の正当化に何ら偽なる信念が関わっていないため、両者を異なる種類のものとする説明がある（なお Lycan は、哲学的直観を信頼不可能であると、実験哲学の開始以前から主張していた少数派であり、彼のゲティア問題に対する態度も、はりぼての納屋ケースについての直観を拒絶するというものである。彼の哲学的直観に対する見解は、Lycan (1996)にある）。第二に、Hetherington (1998)によれば、アメリカ車のケースは、偶然が認識主体が真なる信念をもつように手助けするという、偶然がプラスに働くケースであるが、他方、はりぼての納屋ケースは、問題ない真なる正当化された信念を認識主体が持っていながら、偶然がそれが知識となるのを妨げるという、偶然がマイナスに働くケースである。この相違により、両者は異なる種類に分類される。第三に、Sosa (2007c)は、アメリカ車のケースは動物的知識も反省的知識も成立しないケースであるが、はりぼての納屋ケースは、動物的知識は成立するが反省的知識は成立していないケースであるとして、両者を区別する。

[66] はりぼての納屋ケースに対する直観がいかに不安定かということは、実験哲学に属する研究ではないが、Gendler &

さらに、事例の人工性によってではなく、事例に関するどのような理解にもとづいているのかという観点から、哲学的直観をよりきめ細かく認識論的に分類すべきであるという考えには、ある程度一般的な根拠が存在する。哲学的直観とは、様々に異なる哲学的事例に関する直観の総称であり、それらを全て哲学的事例に関わるものだという理由で認識論的に統一的に扱うことは、個々の直観の主題――特定の状況下での知識、正当化、指示、意図的行為、などの成立、不成立――が全く異なるものである以上、極めて乱暴に思われるからである[67]。このような考えが、ある事例に対する直観は、その事例に対する正しく、十分な理解にもとづいたものでなければならないとする（C3）表面的直観と堅固な直観の相違に訴える直観の使用の擁護の根底にあると思われる。

もちろん、ある種の事例は、他の種の事例よりも複雑で様々な要素を含み、それ故、どの要素に焦点をあてるかによってその事例に対する直観が変動するということはありうる。また、ある事例を正しく理解したとしても、その事例に対する直観が人によって異なるということもありうるかもしれない。前者の場合、どのように人々がその事例を理解したのかということを慎重に確かめることなしに、無批判にその事例に対する直観を証拠として用いることはできない。また、後者の場合は、もしそのような事例が存在するならば、それこそ、その事例に対する直観は不安定だと結論する以外になく、その事例に対する直観の証拠としての妥当性は無効化されざるをえない。しかしながら、そうした事例が存在するとしても、それが実験的制限主義者の懐疑論を立証するのに十分だと言うことはできない。何故ある種の事例に対する直観が不安定なのかという理由には、その事例の記述が含む様々な要素、その記述に基づく事例の理解の仕方、また、その事例に含まれる概念の複雑さ、多義性、曖昧性といった様々なファクターが考えられ、どのような理由が与えられうるのかも事例によって異なりうる以上、ある事例に関する直観の不安定性についての説明が、そのまま他の事例にも適用可能であるとすることはできないからである。実験的制限主義者の懐疑論が前提とする「大部分の哲学的事例はその人工性ゆえに、程度の差はあれ、同様の認識論的制約を被る」という想定は、こうした事例ごとに異なる説明の可能性を無視した上で成立しているに過ぎない[68]。

これらの考察は、実験的制限主義が依拠する一般化（1）を否定するには十分である。しかし、当然ながら、直観が一様に被る認識論的制約が存在するという可能性が全く存在しないということを示すわけではない。そのような制約が存在するかどうかは、かなりの程度経験的な問題であり、実験哲学はこの点の経

Hawthorne (2005)によって説得力のある形で論じられている。また、DeRose (2009, ch. 1, fn. 24: 23; ch. 2, fn. 2: 49)が指摘しているように、そもそもこのケースで「知らない」という直観を引き出すには、ある程度複雑な状況設定が必要とされる。シンプルな二者択一ではなく、評定尺度を用いて実験を行ったことが SAW の参加者の直観に影響を与えたのではないかという指摘は、Cullen(2010)にある。通常の設定を用いても、DeRose の定める設定を用いても、SAW の結果と異なる「知っている」という直観を多くの人が持つという実験結果を、Colaço, Buckwalter, Stich & Machery (2014)が報告している（通常の設定だけを対象にした Turri, Buckwalter & Blouw (2015)の実験でも、この結果は再現された）。しかし、彼らが用いた設定は、実のところ DeRose のものと異なっている。したがって、この結果は、このケースに対する直観の不安定性の経験的な証拠となると考えられる。

[67] この点はあくまで、きめ細かい直観の分類を行うべき認知的理由に過ぎず、より荒い分類を行うべきだとする他の種類の理由は存在しうる。Andow (forthcoming)はまさに、「より良く哲学を行う方法は何か」という哲学一般についての方法論的問題を追求するという観点からは、荒い分類を採用すべき実践的理由が存在すると論じている。

[68] Talbot (2013)はこの想定と全く逆に、人工的でない卑近な事例は、その卑近さ故に他の同様の事例との類似性によって単純に判断されやすいため、他の事例と類似しない人工的な事例の方が信頼性の高い直観を生み出す、と論じてさえいる。

験的解明に貢献すると筆者は考える。この問題の解答は、人々がどのように個々の事例に対する特定の直観に導かれるのか、すなわち、直観を生み出すプロセスに対するある程度の経験的知見なしには決定できないからである。そして、実験心理学的手法はそうした経験的知見を獲得するための一つの方法を提供する。ここで必要なのは、実験的制限主義のような性急な懐疑的結論ではなく、むしろ実験的記述主義のように、個々の事例とそれに対する直観を体系的に収集し、個々の直観、そして直観一般がどのようにして生じるのかを経験的に検討するという態度である。

例えば SAW の行った実験は、事例の提示される順番という従来知られていなかった種類の哲学的直観に対する認識論的制約の存在を示すものである。この点で彼らの実験は注目に値するものであるが、SAW の実験は同時に、ある種の事例に対する直観はその制約の影響を受けずに安定しているということも示している。また、人間体温計ケースに関する直観の不安定性についても、Wright (2010, 2013)による極めて興味深い調査結果が存在する。彼女は、SAW の実験を再現するとともに、各ケースについてどの程度確信と信念の強さをもって答えを与えたかを尋ねた。結果は、直観が不安定性を示す人間温度計ケースのような事例に関する直観については、明確に知識が成立、不成立であるケースよりも確信度、信念の強度がかなり低いというものであった[69]。Wright は、実験を重ねた上で、内観によって直観の不安定性を信頼可能な形で検出することができる、と結論する。哲学的直観のうちどの事例に対する直観がこの制約を被るのか、またどの程度その制約を回避する方法が存在するのかは、今後の経験的（ないし非経験的）探求によって徐々に明らかになると予想される。実験的制限主義が要求する直観の使用の禁止がどの程度妥当なのかという問題は、そうした探求の成果を待って答えを出すべきものだろう[70]。

同様に、実験的制限主義がしばしば訴える（B1）認知的バイアスからの一般化もまた、同種の性急な態度であるようにしか思われない。確率に関する直観、判断が様々なバイアスの影響を受け、それ故信頼可能ではないということが仮に正しいとしても、それと哲学的直観を認識論的に類似しているとみなす根拠は特に見あたらないからである。ましてや、確率的直観が、確率に関する直観として、直観の主題によって分類されているのに対し、哲学的直観には、そうした統一的主題は存在しない[71]。経験的根拠なしに、哲学的直観が一様に何らかの種類のバイアスの影響を避けられないと想定することは、単に論点先取になるだろう。また、そうした一般的制約が存在するとしても、それが知覚などの他の認知能力に一般化されうるほど広範なものであるならば、実験的制限主義は単なる一般的な懐疑論に陥る危険性に再び直面することになる。

これらの理由で、実験的制限主義の懐疑論が依拠する想定（1）「非現実的で突飛な事例への実験結果の一般化」は、拒否されるべきだと結論することができる。筆者の考えでは、哲学的直観に対する認識論的制約の存在は、事例ごとに検討されるべき事柄であり、そうした制約を特定するために、個々の事例の分析に通じた哲学者の知見、技能は有益な手段となりうる。また、そうした技能が存在するならば、（C4）

---

[69] Zamzow & Nichols (2009)も、類似した結果を倫理学で用いられる事例に関して報告している。

[70] Neta (2012)は、どのようなときに直観が事例の提示される順序によって影響を受けるのかを、直観によってアプリオリに知ることができると論ずる。筆者も、直観の安定性、信頼性に関する非経験的探求が可能であることを否定しない。

[71] Bealer (1998b, 1998c, 1999)は、（B1）の批判に対して、確率的直観と哲学的直観は種類が異なるため、一般化は妥当ではないとして拒絶する。しかし、彼はこれらがどう異なるのかということを何ら具体的に説明していない。

専門的技能による哲学者の直観の信頼性の擁護で述べられていた路線に沿いつつ、哲学者の直観は非哲学者の直観に比べ安定しており、また信頼可能であると言うことができる（もちろん、このことは哲学者の直観は常に安定性、信頼性が高いということを意味しない）。この点が立証できるならば、実験的制限主義の懐疑論が依拠する想定（2）「非哲学者の直観の被る認識論的制約を、哲学者の直観に一般化できる」もまた、拒否されるべきだということが帰結する。以下では、哲学者の持つ技能がどのようなものかを具体的に説明し、（2）の一般化を疑問視する根拠を提出する。

（C4）を支持する論者のうち、Ludwig (2007, 2010)は哲学者の技能を概念の十分な把握に関連するものと見なし、Williamson (2004, 2007b, ch. 5 & 6, 2011b)は一般の認知的技能の洗練に過ぎないと見なしている。筆者の見解では、この技能は概念的、認知的な洗練を含むが、より実践的性格の強いものである。それは何よりも、科学者が実験を設計したり、実験の実行に問題があれば修正するという過程で用いている実践的技能に類似する、思考実験を設計、修正、提示するための実践的な技能である。また、この技能の習得には、哲学的な知見を広く見聞し理解する以外に、思考実験の設計やそれに関する理解、解釈を他者からのフィードバックによって見直すという、職業的哲学者育成の訓練に含まれる社会的な条件も不可欠であると考える。また、こうした社会的条件は、育成期間を終え職業的哲学者となった以後も、他の哲学者たちとの意見交換や論文の査読、または学生に向けた思考実験の説明（とその失敗）を通じて、どのようにして思考実験を提示、記述すべきか、またどのようにして意図した理解を他者に伝えるのかという点を改良する際にも機能している。したがって、この技能は何か特殊な能力というわけではなく、その習得の過程は、専門的技能としての哲学が研究または提示、伝達される社会的文脈にすでに組み込まれている（もちろんこの技能の習得、洗練の度合いはこうした社会的条件や個人の資質に応じて哲学者ごとに異なる）[72]。

さらに、筆者の見解では、哲学的な技能は、哲学の諸分野に一般的に適用可能なものもあるにせよ、ある分野に特化された形で習得されるという意味で、ローカルなものである。このことは、上述の社会的条件が専門に特化された形で機能することが多いという理由だけでなく、以下の理由で支持される。哲学者はしばしば、ある事例に関して他者が誤った直観を持つことを説明するために、何らかの概念的混乱や他の心理的要因に訴えることで、直観の誤りの説明を提示する。そうした説明は、錯誤説(error theory, theory of error)と呼ばれるが、こうした錯誤説の妥当性は、多くの場合、その哲学者が従事する専門分野に固有の知識、概念の理解に依存するからである。例えば、自身の直観とは異なる「ヘスペラスとフォスフォラスが同一でないことは可能である」という直観を説明にするために、Kripke (1980)は二つの錯誤説に言及している[73]。一つは、形而上学的様相を認知的様相として誤って理解するという説明である。「ヘスペラスとフォスフォラスが同一でないことは可能である」という直観に含まれる「可能である」という概念が認知

[72] こうした哲学の学問としての社会性と直観の信頼性の関係については、Jackson (2011)、Levy (2014)、Williamson (2009)も言及している。また本文中の論点とは異なるが、直観の信頼性に関する社会的観点からの考察として、Goldman (2010)も参考になる。

[73] Kripke (1980: 103–5; 140–4)を参照のこと。Kripke は直観とその報告を区別し、直観は正しいがその報告が誤っているというケースを説明するのに錯誤説を用いている。Bealer (2008)は、Kripke の錯誤説は直観の相違を説明すると見なした方が自然であると示唆する。注53で述べたように、本稿ではこの区別を重要視しないため、ここでは Bealer にしたがって、Kripke の錯誤説を直観の相違を説明するものとして記述している。

的様相を意味しているならば、その限りでこの直観は正しく、クリプキの唱える同一性の形而上学的必然性とは矛盾しない。二つめの説明は、この直観を持つ者は、「そこの住人が我々と同様の観察証拠にもとづいて、ヘスペラスと呼んでいた星が、後に彼らがフォスフォラスと呼ぶ星ではなかったと判明するような可能世界が存在する」ということを根拠にしているというものである。この主張そのもの正しさは何ら問題なく受け入れられるが、こうした可能世界の存在は、クリプキがこの事例により問題にしている形而上学的可能性・必然性とは無関係である。こうしてクリプキは、他の人が自分のものと一見して異なる直観を持つ理由を、形而上学的可能性・必然性に関する意味の混同、誤解によって説明しようとする。同様にクリプキは、MMNS の使用したゲーデルケースに関しても、Deutsch (2009)、Ludwig (2007)が指摘するような、話者の指示と意味論的指示の混同を注意している(Kripke 1980, fn. 36: 85–6)[74]。

認識論においても、ゲティアケースに関する「知っていない」という直観に対し、有力な錯誤説を提示することが可能である。次のような手続きによって、知識が明確に成立している事例からゲティアケースを構築できることは、認識論ではよく知られている[75]。まず、その事例において認識主体が知っている命題が、何らかの悪運によって、たまたま偽であるように事例を改変する。次に、その改変された事例における偽である命題が、さらに何らかの幸運によって、たまたま真であるように再び事例を改変する。この手続きによってえられた事例は、「正当化されているにもかかわらず、幸運ないし偶然によって信念が真である」という条件を満たすことにより、ゲティアケースの一例となる。この手続きを経ることによって、知識が明確に成立しているケースとゲティアケースの相違を理解させることができ、ゲティアケースで知識が成立しているという直観を持っている人に対して、その直観がゲティアケースの成立条件を見過ごしているためだと説明することができる。事実、Turri (2013)は、この手続きを組み込んだ形でゲティアケースを提示した実験では、ほとんどの参加者がゲティアケースで知識が成立していないという直観を持ち、異なる文化に属する参加者でも相違しないという結果を報告している。また、WNS の使用した塗装されたラバケースに関しても、認識論ではそもそも、その直観を説明するのために幾つかの異なる説明が提示されている[76] [77]。

こうした錯誤説は、事例ごとに、あるいは事例の種類ごとに異なるものであり、それを構築するには、その分野についてのローカルな背景知識を習得するとともに、多くの事例を検討し、それについて他者と議論するといった経験が不可欠であるように思われる[78]。というのも、こうした錯誤説の構築には、どのように他

---

[74] Devitt (2011, 2012a, 2012b, 2012c, 2015)は、言語学・言語哲学にとって重要なのは専門家の直観だとして、非専門家の直観の信頼不可能性から言語哲学の方法論に対する制限主義を導く MMNS を批判する。この批判に対して、Machery は(2012a, 2012b, 2015b)で応じるなど、批判の応酬が続いている。Machery (2012a)は、Kripke を読んだことのある可能性が高い言語哲学、言語学の分野に従事する者は、ディスコース分析や歴史言語学、社会言語学といったその可能性の低い分野に従事する者よりも、指示の因果説に合致した直観を持つ割合が高いという実験結果を報告している。この結果は、Devitt に対する再批判としてよりも、指示についての専門的技能がどの程度ローカルなものなのかを考えるための経験的証拠の一つとして興味深い。

[75] 例えば、Zagzebski (1994)を参照のこと。

[76] このケースについての哲学者の直観は、おおむね知識が成立していないというものだが、この直観を正しいとするにせよ、誤っているとするにせよ、様々な種類の説明が提示されている。この点に関する文献はあまりにも膨大になるため言及を避けるが、錯誤説の一例として、Rysiew (2001)を挙げておく。

[77] De Cruz (2015)も、哲学者の専門的技能は特定の直観を生じさせる思考実験の設計に関わるとする。

[78] 最も頻繁に用いられる錯誤説は、意味論的条件と語用論的条件の混同である。Kauppinen (2007)もこの点を強調して、堅固な直観は意味論的反省のみに由来するとしている。しかしもちろん、どの錯誤説が正しいかは、ケースごとに

者がある事例について誤った理解を持つのか、またどのように他者がある事例に関する特徴、あるいはそれに関わる概念によってミスリードされるのかに関する知識が必要だからである[79]。

このような専門的技能の存在は、実験的制限主義者の懐疑論が依拠する、「彼らの実験結果は、哲学者の哲学的直観へと一般化できる」という想定（2）に対する反論となる。こうした専門分野に関する哲学的技能や知識によって、哲学者たちの個々の専門分野についての直観は、一般の人々が持つ直観よりもミスリードされることが少なく、ある程度信頼性が高いと言うことが可能だからである（ただし、この信頼性は各哲学者の個人の資質や技能の習得度合い、そしてまたその直観の主題である分野に応じて異なりうる）。したがって、哲学者の専門的技能の存在から、「哲学者の直観は（ある程度）一般的に安定し、信頼可能である」、あるいは「哲学者の直観は（ある程度）一般的に非哲学者の直観よりも認識論的に優先される」といった一般化を行うことにより、想定（2）を否定し、制限主義に対する批判を導くことができる[80] [81]。

この「哲学者の直観が一般的に安定し、信頼可能である」という一般化は、「哲学者の直観が常に安定し、信頼可能である」ことを意味せず、また、この一般化に依拠する想定（2）への反論は、哲学者の直観に対する経験的な探求が不必要であることを意味しない。そもそも想定（1）への反論で示したように、筆者は現在のところ、あらゆる哲学的な事例に共通する認識論的制約の存在に懐疑的である。このため、この一般化は、哲学者に共通する一般的な認知的条件から導出されたものではなく、各々の専門分野において哲学者がある程度の概念的、経験的専門的知識、技能を持っているという偶然的条件の総合としての弱い一般化であるに過ぎない。したがって、哲学者の直観がどのような条件下で不安定になり、また信頼性が低下するのかも、さらに経験的（ないし非経験的）に検討されるべきだと筆者は考える（例えば、

異なるローカルな問題である。

[79] 直観に影響する哲学者の専門的技能が他の分野の研究者の専門的技能とどの程度類似し、また相違するのかは興味深い問題である。Ryberg (2013)は、哲学者の専門的技能は、過去の経験によって生み出されたものではないという点で数学者の専門的技能とは異なると指摘し、そこから哲学者の直観が非哲学者の直観よりも信頼性が高いとは言えないと結論する。Rini (2014)は Ryberg に応答し、哲学者の専門的技能は、数学者のそれとは異なるが、物理学者、医者、法律家のそれに近いと論じ、Ryberg の議論は成功していないとする。また、Andow (2015a)は、哲学者の専門的技能も過去の経験により生み出されたものであるとし、Ryberg の議論を批判する。しかしながら、Nado (2014b)は数学者や物理学者は直観を証拠としての使用しないと指摘し、これらの分野の専門的技能と直観に関する哲学的な専門的技能を類比的に捉えることを批判している。

[80] 実のところ、こうした専門的技能が哲学者の持つ直観に影響を及ぼすと考える必要はなく、Rini (2015: 434)、Nado (2014a: 635)が示唆するように、自分たちの直観の使用を制限する反省的技能と考えた方が適切かもしれない。つまり、ある直観を不可避的に持つ場合であっても、専門的技能によって錯誤説がその直観に適用されると判断されるならば、哲学者はその直観を分析や理論の正当化のために使用することを避けることができると考えることもできる。こう考えるならば、注61で述べられたような強い意味での直観の信頼性に対する（二階の）正当化の欠如が実験的制限主義の懐疑論の根拠であるとしても、専門的技能に訴えることはその懐疑論の批判として有効である。

[81] 哲学者の専門的技能に訴える伝統的哲学の方法論の擁護は、注38で触れた Schwitzgebel & Cushman (2012)、Tobia, Buckwalter & Stich (2013)、Tobia, Chapman & Stich (2013)、Vaesen, Peterson & Van Bezooijen (2013)などの哲学者の直観を対象とした実験の結果により、完全には成功していないという指摘がされている（この論争状況のサーヴェイとして、Cokely & Feltz (2014)、Nado (2014a)がある。また Nado (2014b)は多くの論点を導入しつつ、この路線の擁護を批判している）。さらに、Buckwalter (forthcoming)、Machery (2015b)は、専門家が陥るバイアスについて豊富な事例を紹介している。本稿ではこれらの批判に十分に応答することはできないが、さしあたり、Rini (2015)が論じているように、これらの実験が専門的技能をきちんと測定しているかには疑問の余地があること、Cappelen (2014b)が指摘するように、実験の状況は哲学者がその専門的技能を発揮する通常の状況とはかなり異なっていることは指摘できる。また、本稿の論点は、哲学者の直観の信頼性があらゆる事例に対して常に成り立つというものでも、それが経験的な反証にさらされないというものでもないため、その信頼性が実験によって部分的に否定される余地は認められる。

比較的歴史が浅いなどの理由で専門的な技能が十分に蓄積されていない分野にはこの一般化が可能ではないということは、十分にありうる)。また、哲学者が技能の一部として使用する錯誤説は多くの場合、どのようにして人々が誤った直観を持つのかについての、すなわち直観の心理プロセスについての経験的な説明である[82]。また、そうした錯誤説についての知識を哲学者が持っていない場合、一般の人々の直観を哲学者の直観に対して認識論的に劣っているとする理由も見あたらない。しかも、錯誤説はしばしば他の哲学者の直観を説明するために提出されることからも分かるように、錯誤説の説明が哲学者の直観に適用されないということは保証されていない(したがって、(C4)の批判が、哲学者の直観が非哲学者の直観に比べて常に特権視されるべきだということを含意するならば、筆者は同意できない)。ここで必要なのは、錯誤説の妥当性、すなわち哲学者、非哲学者を含む人々が実際にどのようにミスリードされるかを、経験的に検証することである。この点で、先に触れた実験的記述主義のプロジェクトと伝統的哲学は相互補完的なものになるはずである[83]。以下、それらがどのように補完しあうのかを素描してみたい。

哲学者が直観プロセスについての経験的技能や知識を持っているということは、(B2)調整問題に対する少なくとも部分的な回答になりうる。調整問題からの批判に対して(C1)直観の一般的信頼性の擁護が提出された際に、どのような状況下で知覚が誤るのかがある程度詳しく知られているのに対し、直観に対するそのような知識は存在しない、と実験的制限主義者は再批判を行なっていた。しかしながら、伝統的哲学において提示される多くの錯誤説の存在は、ある分野を専門とする職業的哲学者が、その分野で用いられる様々な事例に関する直観の誤りとその原因について、ある程度豊富な知識を持っていることを裏付ける[84]。そして、実験器具の使用や調整が、その器具の仕組みやプロセスについての技能、知識によって可能になるように、こうした哲学者の技能、知識も、直観を調整するために利用可能である[85]。先に述べたように、この知識の多くは経験的なものである以上、より多くの事例に対する直観を経験的に検討することによって、より深化、発展しうるものである。こうした経験的探求は、調整問題に対するより十分な回答を与えることに貢献するだろう。

もちろん、実験的制限主義者は、こうした技能が、単純に哲学者の理解を共有させるためのものであるならば、(B3)理論による汚染の危険性が増大するだけだと指摘するだろう。しかし、この理論による汚染という問題は、哲学的直観の証拠としての妥当性に向けられた批判の中で最も説得力がないように思われる。第一に、この問題は哲学者の直観は自らの理論を支持するように誘導されるというものであるが、こ

---

[82] この点に関する説得的な議論として、Ichikawa (2009a)を参照のこと。

[83] Ludwig (2007)はこの点に実験哲学の意義を見いだしている。哲学的技能を経験的なものとみなすならば、それは彼らが日常的に行っている研究、教育、議論によって培われる、いわば身近な実験哲学の成果と言えるかもしれない。これは、本稿のアイデアを議論した際に Jeremy Fantl が、Ludwig の見解の含意として述べたものである。Ludwig が実際にこうした見解を持っているかは明確ではないが、実験哲学と伝統哲学がどの程度相違するのかを再考するためには、興味深い解釈である。

[84] この点と直接関係するわけではないが、Dunaway, Edmonds & Manley (2013)は、約200人の哲学者(教員、大学院生)が協力した調査で、実験哲学によって経験的に発見された特定の事例に関する人々の直観の変化について、これらの哲学者が実験を行うことなくほぼ正確に予測することができたという興味深い報告をしている。

[85] Weinberg, Gonnerman, Cameron & Alexander (2010)は同様の意見を、錯誤説に特に言及することなく述べている。この論文は、実験的制限主義の懐疑論を擁護することから始められているが、結論は極めて穏健な、実験的記述主義に近いものになっている。

れは現在のところ単なる仮説に過ぎず、何らかの経験的証拠が与えられているわけではない。第二に、伝統的哲学で特定の直観が理論の反証に利用される際、その理論の支持者たちでさえその直観を共有しているのが常であり、そうでなければほとんど無視されるからである[86]。つまり、理論と直観の関係はある程度独立であるか、少なくともある哲学者の直観が常に彼の理論を支持するようなものではないと言うことができる（（A2）哲学的直観の心的身分で触れられたように、直観の内容は一般に信念に影響されにくいという特徴を持っている）。もちろん、先に述べたように、ゲティアケースで知識が成立しているという直観を持っている人に対し、その事例は「幸運ないし偶然によって信念が真である」と説明して、彼らの直観を調整するということはしばしば生じる。しかし、様々な知識の理論は、この認知的幸運をどのように特徴づけるのかという点で大きく相違するのであり、この説明を行うことは、何ら特定の理論を支持するような情報を与えることではない。どの程度の情報が調整のために最低限要求されるのか、またそれをどのように理論中立的に伝えるのかということも、哲学者の持つ経験的、実践的技能の一部を形成すると思われる[87]。第三に、Williamson (2007: 191)が指摘するように、哲学教育や訓練の結果として、直観が変化することを汚染と呼ぶならば、他の諸科学の教育、訓練の結果として、観察が変化することも汚染と呼ばれなければならないだろう。この指摘を受けてなお、実験的制限主義が（B3）の路線の批判を維持しようと思うならば、再びより一般的な懐疑論と特定の範囲の哲学的直観に関する懐疑論をどのように区別するのかという問題に答えなければならない。

本節では、実験的制限主義の提示する懐疑論に対する二つの反論を述べた。最初の反論において、その懐疑論が依拠する「哲学的事例の人工性の度合いと、それに対する直観の不安定性ないし信頼不可能性は比例する」という想定を批判し、よりきめ細かな個々の事例の理解に基づく直観の分類が必要であると論じた。事例についての誤った理解や不十分な理解によって生じる直観は、（C3）で説明された意味での表面的直観であるに過ぎない。実験的制限主義者は、調整問題に訴えることで、表面的直観と堅固な直観の区別を批判する。しかし、哲学的直観一般をどのように調整するかという問題と、個々の事例に対する直観をどのように調整するのかという問題は、個々の直観に対する認識論的制約が異なりうるということが認められるならば、ある程度別個に扱われるべきである。第二の反論において、調整問題は個々の直観が生じるプロセスに関する理解をより深めることによって解決可能であると論じた。こうした理解を達成するための重要な手がかりとして、職業的哲学者が持つ錯誤説は大いに有効であるはずである。

これらの二つの反論において示されたのは、ある事例に対する直観の証拠としての妥当性を疑問視するためには、個々の直観に対して可能な錯誤説の適用可能性を検討することが有益である、ということである。この点において、伝統的哲学と実験哲学の関係は、実験的制限主義者が主張するような一方が他方の方法論を完全に無効化するという極端なものではなく、むしろ相互に補完し合うという互恵的なものと考えることができる。筆者自身は、ある事例に対する直観は、その直観そのものか、その直観の例化する

---

[86] Mizrahi (2012)は、直観に訴えることが強力な論証になるための必要条件は、その直観に対する哲学者の合意が存在することであると論じる。Mizrahi (2013)はさらに、直観の信頼性を必要条件として追加する。これらの Mizrahi の論点に対する批判とその応戦は、Mizrahi (2015b)、Munoz-Suárez (2014, ms.)にある。

[87] こうした点を検討するということは、哲学者が用いる仮想的事例とその提示の仕方を個別に検討するということである。Brendel (2004)、Cappelen (2012)、Dennett (2014)、Deutsch (2015)、Ward (1995)は、そうした事例研究を含んでいる。

直観プロセスに対する、何らかの錯誤説や認識論的制約が具体的に提起されない限り正当化されると考えるという点で、直観の信頼可能性による正当化を支持する[88]。実験哲学は、こうした直観プロセスをどのように個別化、分類するのか、また直観がどのような状況で誤りに導かれるのかという問題に解答を与える理論を構築するための経験的証拠を提供しうるという点で、伝統的哲学にとっても大きな意義を持つ。そして、伝統的哲学者の持つこの点に関する実践的技能は、この点を検証するための個々の実験を設計する際に大きな助けにもなるはずである。こうして伝統的哲学と実験哲学は相互に助け合い、将来の哲学のために豊かな協同関係を築くことができるのである[89]。

謝辞

本稿は 2009 年の第一回応用哲学会年次総会のワークショップでの発表のために執筆され、2012 年夏と冬に、主に参考文献、脚注を追加するなど改稿を行った。投稿を経て 2013 年の秋に論文が掲載可とされた後、実験哲学関係の膨大な量の文献が出版され続けるという状況に直面したため、それらの文献を取り入れるべく、その後断続的に 2015 年夏まで、さらに改稿を繰り返した（ただし、これらの改稿は主に参考文献、脚注を充実させるためであり、本文中の論点にはほとんど変更を加えていない）。本稿は部分的に実験哲学に関するサーヴェイとしても意図されているため、これらの文献を反映させることなく出版することはできないと判断したからであるが、思いの外時間がかかり、ご迷惑をおかけした。この期間お待ちいただいた応用哲学会には、お詫び申し上げたい。実のところ、初稿執筆から完成まであまりにも長い時間が経過したため、本稿の論点の多くは、現在の筆者の考えとは異なっている。この点についても修正しようと試みたが、あまりにも変更の度合いが大きくなるため、断念せざるをえなかった。初稿の執筆から出版までの期間において、様々な団体からの研究援助に助けられた。特に本論文に関連する研究に対しては、カナダ政府から Government of Canada Post-Doctoral Research Fellowship、日本学術振興会から特別研究員奨励費（課題番号 14J03883）による援助を受けた。ここに記して謝意を表したい。また、本稿のアイデアに関する議論を通じて有益な示唆や助言を与えてくれた Jeremy Fantl 氏、原稿を読みコメントしてくれた井頭昌彦氏、鈴木生郎氏、山田竹志氏、また飯島和樹氏、飯塚理恵氏を始めとする東京大学で開催されていた実験哲学勉強会のメンバーに感謝する。

参考文献

Adleberg, T., Thompson, M. & Nahmias, E. (2015). “Do Men and Women Have Different Philosophical

[88] この点において、筆者の立場は実験的分析に親和的であると思われるが、統計的調査のような実験だけでなく、哲学者の概念的知識、技能も、伝統的哲学の方法の適用を制限するために有効であることを認める点で異なる可能性がある。

[89] これ以外に、実験哲学と伝統的哲学の様々な協同関係のあり方を、Mortensen & Nagel (forthcoming)は示唆している。また、ここで描いた協同関係の優れた一例として、Turri (forthcoming)、Turri, Buckwalter & Blouw (2015)が挙げられる。

Intuitions? Further Data.” *Philosophical Psychology* 28 (5): 615–641.

Alexander, J. (2010). “Is Experimental Philosophy Philosophically Significant?” *Philosophical Psychology* 23 (3): 377–389.

———. (2012). *Experimental Philosophy: An Introduction*. Cambridge: Polity Press.

Alexander, J., Mallon, R. & Weinberg, J. M. (2010a). “Accentuate the Negative.” *Review of Philosophy and Psychology* 1 (2): 297–314.

———. (2010b). “Competence: What’s in? What’s out? Who Knows?” *Behavioral and Brain Sciences* 33 (4): 329–330.

Alexander, J. & Weinberg, J. M. (2007). “Analytic Epistemology and Experimental Philosophy.” *Philosophy Compass* 2 (1): 56–80.

———. (2014). “The “Unreliability” of Epistemic Intuitions.” In Machery & O’Neill (2014): 128–145.

Andow, J. (2014). “Intuitions, Disagreement and Referential Pluralism.” *Review of Philosophy and Psychology* 5 (2): 223–239.

———. (2015a). “Expecting Moral Philosophers to be Reliable.” *Dialectica* 69 (2): 205–220.

———. (2015b). “How ‘Intuition’ Exploded.” *Metaphilosophy* 46 (2): 189–212.

———. (forthcoming). “Thin, Fine and with Sensitivity: A Metamethodology of Intuitions.” *Review of Philosophy and Psychology*.

Antony, L. (2012). “Different Voices or Perfect Storm: Why are There so Few Women in Philosophy?” *Journal of Social Philosophy* 43 (3): 227–255.

Appiah, K. W. (2008). *Experiments in Ethics*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Ayer, A. J. (1946). *Language, Truth and Logic*, 2nd Edition. New York, NY: Dover Publications.

Barry, L. (2010). “Are Cantonese Speakers Really Descriptivists? Revisiting Cross-Cultural Semantics.” *Cognition* 115 (2): 320–329.

Bartels, D. M. (2008). “Principled Moral Sentiment and the Flexibility of Moral Judgment and Decision Making.” *Cognition* 108 (2): 381–417.

Bealer, G. (1992). “The Incoherence of Empiricism.” *Proceedings of the Aristotelian Society* Supplementary Volume 66: 99–138.

———. (1996a). “A Priori Knowledge and the Scope of Philosophy.” *Philosophical Studies* 81 (2–3): 121–142.

———. (1996b). “A Priori Knowledge: Replies to William Lycan and Ernest Sosa.” *Philosophical Studies* 81 (2–3): 163–174.

———. (1998a). “A Theory of Concepts and Concept Possession.” *Philosophical Issues* 9: 261–301.

———. (1998b). “The A Priori.” In J. Greco & E. Sosa (eds.), *The Blackwell Guide to Epistemology*. Oxford: Blackwell Publishing: 243–270.

———. (1998c). “Intuition and the Autonomy of Philosophy.” In DePaul and Ramsey (1998): 201–39.

———. (1999). “A Theory of the A Priori.” *Philosophical Perspectives* 13: 29–55.

———. (2008). “Intuition and Modal Error.” In Q. Smith (ed.), *Epistemology: New Essays*. Oxford: Oxford University Press: 189–225.

Bengson, J. (2013). “Experimental Attacks on Intuitions and Answers.” *Philosophy and Phenomenological Research* 86 (3): 495–532.

———. (2014). “How Philosophers Use Intuition and ‘Intuition’.” *Philosophical Studies* 171 (3): 555–576.

———. (2015). “The Intellectual Given.” *Mind* 124 (495): 707–760.

Boghossian, P. (1997). “Analyticity.” In B. Hale & C. Wright (eds.), *A Companion to the Philosophy of Language*. Oxford: Blackwell Publishing: 331–368.

———. (2011). “Williamson on the A Priori and the Analytic.” *Philosophy and Phenomenological Research* 82 (2): 488–497.

BonJour, L. (1998). *In Defense of Pure Reason: A Rationalist Account of A Priori Justification*. Cambridge: Cambridge University Press.

Booth, A. R. & Rowbottom, D. P. (eds.) (2014). *Intuitions*. Oxford: Oxford University Press.

Boyd, K. & Nagel, J. (2014). “The Reliability of Epistemic Intuitions.” In Machery & O’Neill (2014): 109–127.

Brendel, E. (2004). “Intuition Pumps and the Proper Use of Thought Experiments.” *Dialectica* 58 (1): 89–108.

Brown, J. (2013). “Intuitions, Evidence and Hopefulness.” *Synthese* 190 (12): 2021–2046.

Buckwalter, W. (2012). “Surveying Philosophers: A Response to Kuntz & Kuntz.” *Review of Philosophy and Psychology* 3 (4): 515–524.

———. (forthcoming). “Intuition Fail: Philosophical Activity and the Limits of Expertise.” *Philosophy and Phenomenological Research*.

Buckwalter, W. & Stich, S. P. (2013). “Gender and Philosophical Intuition.” In Knobe & Nichols (2013): 307–346.

Cappelen, H. (2012). *Philosophy without Intuitions*. Oxford: Oxford University Press.

———. (2014a). “Replies to Weatherson, Chalmers, Weinberg, and Bengson.” *Philosophical Studies* 171 (3): 577–600.

———. (2014b). “X-Phi without Intuitions?” In Booth & Rowbottom (2014): 269–286.

Casullo, A. (2007). *A Priori Justification*. New York, NY: Oxford University Press.

Casullo, A. & Thurow, J. C. (eds.) (2013). *The A Priori in Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.

Chalmers, D. J. (2014). “Intuitions in Philosophy: A Minimal Defense.” *Philosophical Studies* 171 (3): 535–544.

Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

———. (1968/2006). *Language and Mind*, 3rd Edition. New York, NY: Harcourt, Brace & World:

Chudnoff, E. (2011a). “The Nature of Intuitive Justification.” *Philosophical Studies* 153 (2): 313–333.

———. (2011b). “What Intuitions are like.” *Philosophy and Phenomenological Research* 82 (3): 625–654.

———. (2013). *Intuition*. Oxford: Oxford University Press.

Cohnitz, D. (2015). “Metaphilosophy of Language.” In Haukioja (2015): 85–108.

Cohnitz, D. & Haukioja, J. (2013). “Meta-Externalism vs. Meta-Internalism in the Study of Reference.” *Australasian Journal of Philosophy* 91 (3): 475–500.

———. (2015). “Intuitions in Philosophical Semantics.” *Erkenntnis* 80 (3): 617–641.

Cokely, E. T. & Feltz, A. (2014). “Expert Intuition.” In Osbeck & Held (2014): 213–238.

Colaço, D., Buckwalter, W., Stich, S. P. & Machery, E. (2014). “Epistemic Intuitions in Fake-Barn Thought Experiments.” *Episteme* 11 (2): 199–212.

Cullen, S. (2010). “Survey-Driven Romanticism.” *Review of Philosophy and Psychology* 1 (2): 275–296.

Cummins, R. (1998). “Reflection on Reflective Equilibrium.” In DePaul and Ramsey (1998): 113–127.

De Cruz, H. (2015). “Where Philosophical Intuitions Come From.” *Australasian Journal of Philosophy* 93 (2): 233–249.

Dennett, D. C. (2014). *Intuition Pumps and Other Tools for Thinking*. London & New York, NY: Penguin Books.

DePaul, M. P. (1993). *Balance and Refinement: Beyond Coherence Methods of Moral Inquiry*. London: Routledge.

———. (1998). “Why Bother with Reflective Equilibrium?” In DePaul & Ramsey (1998): 293–309.

DePaul, M. P. & Ramsey, W. (eds.) (1998). *Rethinking Intuition: The Psychology of Intuition and Its Role in Philosophical Inquiry*. Lanham, ML: Rowman & Littlefield.

DeRose, K. (2009). *The Case for Contextualism: Knowledge, Skepticism and Context*, Vol. 1. New York: Oxford University Press.

Deutsch, M. (2009). “Experimental Philosophy and the Theory of Reference.” *Mind & Language* 24 (4): 445–466.

———. (2010). “Intuitions, Counter-Examples, and Experimental Philosophy.” *Review of Philosophical Psychology* 1 (3): 447–460.

———. (2015a). “Kripke’s Gödel Case.” In Haukioja (2015): 7–30.

———. (2015b). *The Myth of the Intuitive: Experimental Philosophy and Philosophical Method*. Cambridge, MA: MIT Press.

Devitt, M. (2011). “Experimental Semantics.” *Philosophy and Phenomenological Research* 82 (2): 418–435.

———. (2012a). “Whither Experimental Semantics?” *Theoria* 27 (1): 5–36.

———. (2012b). “Semantic Epistemology: Response to Machery.” *Theoria* 27 (2): 229–233.

———. (2012c). “The Role of Intuitions.” In Russell & Fara (2012): 554–565.

———. (2015). “Testing Theories of Reference.” In Haukioja (2015): 31–63.

Dunaway, B., Edmonds, A. & Manley, D. (2013). "The Folk Probably do Think What You Think They Think." *Australasian Journal of Philosophy* 91 (3): 421–441.

Earlenbaugh, J. & Molyneux, B. (2009). "Intuitions are Inclinations to Believe." *Philosophical Studies* 145 (1): 89–109.

Feltz, A. (2008). "Problems with the Appeal to Intuition in Epistemology." *Philosophical Explorations* 11 (2): 131–141.

Fischer, E. (2014). "Philosophical Intuitions, Heuristics, and Metaphors." *Synthese* 191 (3): 569–606.

———. (2015). "Mind the Metaphor! A Systematic Fallacy in Analogical Reasoning." *Analysis* 75 (1): 67–77.

Fischer, E. & Collins, J. (eds.) (2015a). *Experimental Philosophy, Rationalism, and Naturalism. Rethinking Philosophical Method*. London: Routledge.

———. (2015b). "Rationalism and Naturalism in the Age of Experimental Philosophy." In Fischer & Collins (2015a): 3–33.

Fischer, E., Engelhardt, P. E. & Herbelot, A. (2015). "Intuitions and Illusions: From Explanation and Experiment to Assessment." In Fischer & Collins (2015a): 259–292.

Gendler, T. S. & Hawthorne, J. (2005). "The Real Guide to Fake Barns: A Catalogue of Gifts for Your Epistemic Enemies." *Philosophical Studies* 124 (3): 331–352.

Genone, J. (2012). "Theories of Reference and Experimental Philosophy." *Philosophy Compass* 7 (2): 152–163.

Goldman, A. I. (2001). "Reply to Weinberg, Nichls, and Stich." *Philosophical Topics* 29 (1 & 2): 474–479.

———. (2005). "Kornblith's Naturalistic Epistemology." *Philosophy and Phenomenological Research* 71 (2): 403–410.

———. (2007). "Philosophical Intuitions: Their Target, Their Source, and Their Epistemic Status." *Grazer Philosophische Studien* 74: 1–26.

———. (2010). "Philosophical Naturalism and Intuitional Methodology." Romanell Lecture, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association* 84 (2): 115–150.

Goldman, A. I. & Pust, J. (1998). "Philosophical Theory and Intuitional Evidence." In DePaul and Ramsey (1998): 179–197.

Goodman, N. (1965). *Fact, Fiction and Forecast*. New York, NY: Bobbs Merrill.

Greene, J. D. (2002). *The Terrible, Horrible, no Good, Very Bad Truth about Morality and What to Do about It*. PhD. Dissertation, Princeton University.

———. (2003). "From Neural 'Is' to Moral 'Ought': What are the Moral Implications of Neuroscientific Moral Psychology." *Nature Reviews Neuroscience* 4 (10): 846–50.

———. (2008). "The Secret Joke of Kant's Soul." In W. Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, Vol. 3: *The Neuroscience of Morality: Emotion, Disease, and Development*. Cambridge, MA: MIT Press:

35–79.

Greene, J. D. & Haidt, J. (2002). “How (and Where) does Moral Judgment Work?” *Trends in Cognitive Science* 6 (12): 517–523.

Greene, J. D., Nystrom, L. E., Engell, A. D., Darley, J. M. & Cohen, J. D. (2004). “The Neural Bases of Cognitive Conflict and Control in Moral Judgment.” *Neuron* 44 (2): 389–400.

Greenough, P. & Lynch, M. P. (eds.) (2006). *Truth and Realism*. Oxford: Clarendon Press.

Grundmann, T. (2007). “The Nature of Rational Intuitions and a Fresh Look at the Explanationist Objection.” *Grazer Philosophische Studien* 74: 69–87.

———. (2010). “Some Hope for Intuitions: A Reply to Weinberg.” *Philosophical Psychology* 23 (4): 481–509.

Hales, S. D. (2006). *Relativism and the Foundations of Philosophy*. Cambridge, MA: MIT Press.

———. (2012). “The Faculty of Intuition.” *Analytic Philosophy* 53 (2): 180–207.

Hansen, N. (forthcoming). “Experimental Philosophy of Language.” *Oxford Handbooks Online*. Oxford University Press.

Haug, M. C. (ed.) (2014). *Philosophical Methodology: The Armchair or the Laboratory?* London & New York, NY: Routledge.

Haukioja, J. (ed.) (2015). *Advances in Experimental Philosophy of Language*. London & New York, NY: Bloomsbury Academic.

Henderson, D. K. & Horgan, T. (2011). *The Epistemological Spectrum: At the Interface of Cognitive Science and Conceptual Analysis*. New York, NY: Oxford University Press.

Hetherington, S. C. (1998). “Actually Knowing.” *Philosophical Quarterly* 48 (193): 453–469.

———. (ed.) (2006). *Epistemology Futures*. Oxford: Clarendon Press.

Hintikka, J. (1999). “The Emperor’s New Intuitions.” *Journal of Philosophy* 96 (3): 127–147.

Horowitz, A. (2015). “Experimental Philosophical Semantics and the Real Reference of ‘Gödel’.” In Fischer & Collins (2015a): 240–258.

Horvath, J. (2010). “How (not) to React to Experimental Philosophy.” *Philosophical Psychology* 23 (4): 447–480.

Horvath, J. & Grundmann, T. (eds.) (2012). *Experimental Philosophy and Its Critics*. London: Routledge.

Huebner, B. (forthcoming). “What is a Philosophical Effect? Models of Data in Experimental Philosophy.” *Philosophical Studies*.

Ichikawa, J. J. (2009a). “Explaining away Intuitions.” *Studia Philosophica Estonica* 2 (2): 94–116.

———. (2009b). “Knowing the Intuition and Knowing the Counterfactual.” *Philosophical Studies*145 (3): 435–443.

———. (2012). “Experimentalist Pressure against Traditional Methodology.” *Philosophical Psychology* 25 (5): 743–765.

———. (2013). “Experimental Philosophy and Apriority.” In Casullo & Thurow (2013): 45–66.

———. (2014a). “Intuition in Contemporary Philosophy.” In Osbeck & Held (2014): 192–210.

———. (2014b). “Who Needs Intuitions? Two Experimentalist Critiques.” In Booth & Rowbottom (2014): 232–255.

Ichikawa, J. J. & Jarvis, B. (2009). “Thought-Experiment Intuitions and Truth in Fiction.” *Philosophical Studies* 142 (2): 221–246.

Ichikawa, J. J., Maitra, I. & Weatherson, B. (2011). “In Defense of a Kripkean Dogma.” *Philosophy and Phenomenological Research* 85 (1): 56–68.

Iijima, K. & Ota, K. (2014). “How (not) to Draw Philosophical Implications from the Cognitive Nature of Concepts: the Case of intentionality.” *Frontiers in Psychology* 5, Article 799: 1–5.

Jackman, H. (2005). “Intuitions and Semantic Theory.” *Metaphilosophy* 36 (3): 363–380.

———. (2009). “Semantic Intuitions, Conceptual Analysis, and Cross-Cultural Variation.” *Philosophical Studies* 146 (2): 159–177.

Jackson, F. (1998). *From Metaphysics to Ethics: A Defence of Conceptual Analysis*. Oxford: Oxford University Press.

———. (2001). “Responses.” *Philosophy and Phenomenological Research* 62 (3): 653–664.

———. (2011). “On Gettier Holdouts.” *Mind & Language* 26 (4): 468–481.

Jenkins, C. S. I. (2014). “Intuition, ‘Intuition’, Concepts and the A Priori.” In Booth & Rowbottom: 91–115.

Johnson, M. & Nado, J. (2014). “Moderate Intuitionism: A Metasemantic Account.” In Booth & Rowbottom: 68–90.

Kauppinen, A. (2007). “The Rise and Fall of Experimental Philosophy.” *Philosophical Explorations* 10 (2): 95–118.

Kim, M. & Yuan, Y. (2015). “No Cross-Cultural Differences in Gettier Car Case Intuition: A Replication Study of Weinberg et al. 2001.” *Episteme* 12 (3): 355–361.

Knobe, J. (2003a). “Intentional Action and Side-Effects in Ordinary Language.” *Analysis* 63 (3): 190–194.

———. (2003b). “Intentional Action in Folk Psychology: An Experimental Investigation.” *Philosophical Psychology* 16 (2): 309–324.

———. (2004a). “Folk Psychology and Folk Morality: Response to Critics.” *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology* 24 (2): 270–279.

———. (2004b). “Intention, Intentional Action and Moral Considerations.” *Analysis* 64 (2): 181–187.

———. (2006). “The Concept of Intentional Action: A Case Study in the Uses of Folk Psychology.” *Philosophical Studies* 130 (2): 203–231.

———. (2007). “Experimental Philosophy and Philosophical Significance.” *Philosophical Explorations* 10 (2): 119–121.

———. (2010). “The Person as Moralist Account and Its Alternatives.” *Behavioral and Brain Sciences* 33

(4): 353–365.

Knobe, J., Buckwalter, W., Nichols, S., Robbins, P., Sarkissian, H. & Sommers, T. (2012). “Experimental Philosophy.” *Annual Review of Psychology* 63: 81–99.

Knobe, J. & Doris. J. M. (2010). “Responsibility.” In J. M. Doris & The Moral Psychology Research Group (eds.), *The Moral Psychology Handbook*. Oxford: Oxford University Press: 321–354.

Knobe, J. & Nichols, S. (eds.) (2008). *Experimental Philosophy*. New York, NY: Oxford University Press.

———. (eds.) (2013). *Experimental Philosophy*, Vol. 2. New York, NY: Oxford University Press.

Kornblith, H. (1998). “The Role of Intuition in Philosophical Inquiry: An Account with no Unnatural Ingredients.” In DePaul and Ramsey (1998): 129–141.

———. (2002). *Knowledge and Its Place in Nature*. Oxford: Oxford University Press.

———. (2005). “Replies to Alvin Goldman, Martin Kusch and William Talbott.” *Philosophy and Phenomenological Research* 71 (2): 427–441.

———. (2006). “Appeals to Intuition and the Ambitions of Epistemology.” In Hetherington (2006): 10–25.

———. (2007). “Naturalism and Intuitions.” *Grazer Philosophische Studien* 74: 27–49.

———. (2014). “Is There Room for Armchair Theorizing in Epistemology?” In Haug (2014): 195–216.

———. (2015). “Naturalistic Defenses of Intuition.” In Fischer & Collins (2015a): 151–168.

Kripke, S. (1980). *Naming and Necessity*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Kuntz, J. R. & Kuntz, J. R. C. (2011). “Surveying Philosophers about Philosophical Intuition.” *Review of Philosophy and Psychology* 2 (4): 643–665.

Levy, N. (2014). “Intuitions and Experimental Philosophy.” In Haug (2014): 381–397.

Liao, S. M. (2008). “A Defense of Intuitions.” *Philosophical Studies* 140 (2): 247–262.

Livengood, L., Sytsma, J., Feltz, A., Scheines, R. & Machery, E. (2010). “Philosophical Temperament.” *Philosophical Psychology* 23 (3): 313–330.

Ludwig, K. (2007). “The Epistemology of Thought Experiments: First versus Third Person Approaches.” *Midwest Studies in Philosophy* 31 (1): 128–159.

———. (2010). “Intuitions and Relativity.” *Philosophical Psychology* 23 (4): 427–445.

———. (2014). “Methods in Analytic Epistemology.” In Haug (2014): 217–239.

Lycan, W. G. (1996). “Bealer on the Possibility of Philosophical Knowledge.” *Philosophical Studies* 81 (2–3): 143–150.

———. (2006). “On the Gettier Problem Problem.” In Hetherington (2006): 148–168.

Lynch, M. P. (2006). “Trusting Intuitions.” In Greenough & Lynch (2006): 227–238.

Machery, E. (2008). “The Folk Concept of Intentional Action: Philosophical and Experimental Issues.” *Mind & Language* 23 (2): 165–189.

———. (2011). “Thought Experiments and Philosophical Knowledge.” *Metaphilosophy* 42 (3):191–214.

———. (2012a). “Expertise and Intuitions about Reference.” *Theoria* 27 (1): 37–54.

———. (2012b). “Semantic Epistemology: A Brief Response to Devitt.” *Theoria* 27 (2): 223–227.

———. (2014). “What is the Significance of the Demographic Variation in Semantic Intuitions?” In Machery & O’Neill (2014): 3–16.

———. (2015a). “A Rylean Argument against Reference” In Haukioja (2015): 65–84.

———. (2015b). “The Illusion of Expertise.” In Fischer & Collins (2015a): 188–203.

Machery, E., Deutsch, M., Mallon, R., Nichols, S., Sytsma, J. & Stich, S. P. (2010). “Semantic Intuitions: Reply to Lam.” *Cognition* 117 (3): 361–366.

Machery, E., Deutsch, M. & Sytsma, J. (2015). “Speaker’s Reference and Cross-Cultural Semantics.” In A. Bianchi (ed.), *On Reference*. Oxford: Oxford University Press: 62–76.

Machery, E., Mallon, R., Nichols, S. & Stich, S. P. (2004). “Semantics, Cross-Cultural Style.” *Cognition* 92 (3): 1–12.

———. (2013). If Folk Intuitions Vary, then What? *Philosophy and Phenomenological Research* 86 (3): 618–635.

Machery, E., Olivola, C. Y. & De Blanc, M. (2009). “Linguistic and Metalinguistic Intuitions in the Philosophy of Language.” *Analysis* 69 (4): 689–694.

Machery, E. & O’Neill, E. (eds.) (2014). *Current Controversies in Experimental Philosophy*. New York, NY: Routledge.

Machery, E. & Stich, S. P. (2012). “Experimental Philosophy of Language.” In Russell & Fara (2012): 495–512.

Machery, E., Stich, S. P., Rose, D., Chatterjee, A., Karasawa, K., Struchiner, N., Sirker, S., Usui, N. & Hashimoto, T. (forthcoming). “Gettier Across Cultures.” *Noûs*.

Mallon, R., Machery, E., Nichols, S. & Stich, S. P. (2009). “Against Arguments from Reference.” *Philosophy and Phenomenological Research* 79 (2): 332–356.

Malmgren, A. (2011). “Rationalism and the Content of Intuitive Judgements.” *Mind* 120 (478): 263–327.

Martí, G. (2009). “Against Semantic Multi-Culturalism.” *Analysis* 69 (1): 42–48.

———. (2012). “Empirical Data and the Theory of Reference.” In W. P. Kabasenche, M. O’Rourke & M. H. Slater (eds.), *Reference and Referring: Topics in Contemporary Philosophy*. Cambridge, MA: MIT Press: 63–82.

———. (2014). “Reference and Experimental Semantics.” In Machery & O’Neill (2014): 17–26.

———. (2015). “General Terms, Hybrid Theories and Ambiguity: A Discussion of Some Experimental Results.” In Haukioja (2015): 157–172.

Maynes, J. & Gross, S. (2013). “Linguistic Intuitions”. *Philosophy Compass* 8(8), 714–730.

Mizrahi, M. (2012). “Intuition Mongering.” *The Reasoner* 6 (11): 169–170.

———. (2013). “More Intuition Mongering.” *The Reasoner* 7 (1): 5–6.

———. (2014). “Does the Method of Cases Rest on a Mistake?” *Review of Philosophy and Psychology* 5

(2): 183–197.

———. (2015a). “Three Arguments against the Expertise Defense.” *Metaphilosophy* 46 (1): 52–64.

———. (2015b). “On Appeals to Intuition: A Reply to Muñoz-Suárez.” *The Reasoner* 9 (2): 12–13.

Molyneux, B. (2014). “New Arguments that Philosophers don’t Treat Intuitions as Evidence.” *Metaphilosophy* 45 (3): 441–461.

Mortensen, K. & Nagel, J. (forthcoming). “Armchair-friendly Experimental Philosophy.” In Sytsma & Buckwalter (forthcoming).

Munoz-Suárez, C. (2014). “Should We Entitle Strong Appeals to Intuition?” *The Reasoner* 8 (7): 77–78.

———. (ms.). “Ignorance Helps Philosophy: Objections to Mizrahi.”

Murphy, T. (2014). “Experimental Philosophy: 1935–1965.” In T. Lombrozo, S. Nichols & J. Knobe (eds.), *Oxford Studies in Experimental Philosophy*, Vol. 1. Oxford: Oxford University Press: 325–368.

Murphy, D. & Bishop, M. (2009). *Stich and His Critics*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Nadelhoffer, T. (2005). “Skill, Luck, Control, and Intentional Action.” *Philosophical Psychology* 18 (3): 343–354.

———. (2006a). “Bad Acts, Blameworthy Agents, and Intentional Actions: Some Problems for Jury Impartiality.” *Philosophical Explorations* 9 (2): 203–219.

———. (2006b). “Foresight, Moral Considerations, and Intentional Actions.” *Journal of Cognition and Culture* 6 (1): 133–158.

Nadelhoffer, T. & Feltz, A. (2008). “The Actor–Observer Bias and Moral Intuitions: Adding Fuel to Sinnott-Armstrong’s Fire.” *Neuroethics* 1 (2): 133–144.

Nadelhoffer, T. & Nahmias, E. (2007). “The Past and Future of Experimental Philosophy.” *Philosophical Explorations* 10 (2): 123–149.

Nado, J. (2013). “Why Intuition?” *Philosophy and Phenomenological Research* 86 (1): 15–41.

———. (2014a). “Philosophical Expertise.” *Philosophy Compass* 9 (9): 631–641.

———. (2014b). “Philosophical Expertise and Scientific Expertise.” *Philosophical Psychology* 28 (7): 1026–1044.

———. (2014c). “The Role of Intuition.” In J. Sytsma (ed.), *Advances in Experimental Philosophy of Mind*. London & New York, NY: Bloomsbury Academic: 11–43.

———. (2015). “Intuition, Philosophical Theorising, and the Threat.” In Fischer & Collins (2015a): 204–221.

———. (forthcoming). “The Intuition Deniers.” *Philosophical Studies*.

Nagel, J. (2007). “Epistemic Intuitions.” *Philosophy Compass* 2 (6): 792–819.

———. (2012). “Intuitions and Experiments: A Defense of the Case Method.” *Philosophy and Phenomenological Research* 85 (3): 495–527.

———. (2013). “Defending the Evidential Value of Epistemic Intuitions: A Reply to Stich.” *Philosophy and*

Phenomenological Research 87 (1): 179–199.

Nagel, J., San Juan, V. & Mar, R. A. (2013a). "Lay Denial of Knowledge for Justified True Beliefs." *Cognition* 129 (3): 652–661.

———. (2013b). "Authentic Gettier Cases: A Reply to Starmans and Friedman." *Cognition* 129 (3): 666–669.

Nahmias, E., Coates, D. J. & Kvaran, T. (2007). "Free Will, Moral Responsibility, and Mechanism: Experiments on Folk Intuitions." *Midwest Studies in Philosophy* 31 (1): 214–242.

Nahmias, E., Morris, S., Nadelhoffer, T. & Turner, J. (2005). "Surveying Freedom: Folk Intuitions about Free Will and Moral Responsibility." *Philosophical Psychology* 18 (5): 561–584.

———. (2006). "Is Incompatibilism Intuitive?" *Philosophy and Phenomenological Research* 73 (1): 28–53.

Neta, R. (2012). "Knowing from the Armchair that Our Intuitions are Reliable." *The Monist* 95 (2): 329–351.

Nichols, S. (2004a). "Folk Concepts and Intuitions: From Philosophy to Cognitive Science." *Trends in Cognitive Science* 8 (11): 514–518.

———. (2004b). "After Objectivity: An Empirical Study of Moral Judgment." *Philosophical Psychology* 17 (1): 3–26.

Nichols, S. & Knobe, J. (2007). "Moral Responsibility and Determinism: The Cognitive Science of Folk Intuition." *Noûs* 41 (4): 663–85.

Nichols, S., Stich, S. P. & Weinberg, J. M. (2003). "Metaskepticism: Meditations in Ethno-Epistemology." In S. Luper (ed.), *The Skeptics: Contemporary Essays*. Burlington, VT: Ashgate: 227–247.

Nichols, S. & Ulatowski, J. (2007). "Intuitions and Individual Differences: The Knobe Effect Revisited." *Mind & Language* 22 (4): 346–365.

Osbeck, L. M. & Held, B. S. (eds.) (2014). *Rational Intuition: Philosophical Roots, Scientific Investigations*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ostertag, G. (2013). "The 'Gödel' Effect." *Philosophical Studies* 166 (1): 65–82.

Pohlhaus Jr., G. (2015). "Different Voices, Perfect Storms, and Asking Grandma What She Thinks: Situating Experimental Philosophy in Relation to Feminist Philosophy." *Feminist Philosophy Quarterly* 1 (1), Article 3: 1–24.

Praëm, S. K. & Steglich-Petersen, A. (forthcoming). "Philosophical Thought Experiments as Heuristics for Theory Discovery." *Synthese*.

Pust, J. (2001). "Against Explanationist Skepticism regarding Philosophical Intuitions." *Philosophical Studies* 106 (3): 227–258.

Rawls, J. (1971). *A Theory of Justice*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Rini, R. A. (2014). "Analogies, Moral Intuitions, and the Expertise Defence." *Review of Philosophy and Psychology* 5 (2): 169–181.

———. (2015). "How not to Test for Philosophical Expertise." *Synthese* 192 (2): 431–452.

Russell, B. (1912). *The Problems of Philosophy*. London: Oxford University Press.

Russell, G. & Fara, D. G. (eds.) (2012). *Routledge Companion to the Philosophy of Language*. New York, NY: Routledge.

Ryberg, J. (2013). “Moral Intuitions and the Expertise Defense.” *Analysis* 73 (1): 3–9.

Rysiew, P. (2001). “The Context-Sensitivity of Knowledge Attributions.” *Noûs* 35 (4): 477–514.

Schwartzman, L. (2012). “Intuition, Thought Experiments, and Philosophical Method: Feminism and Experimental Philosophy.” *Journal of Social Philosophy* 43 (3): 307–316.

Schwitzgebel, E. & Cushman, F. (2012). “Expertise in Moral Reasoning? Order Effects on Moral Judgment in Professional Philosophers and Non-Philosophers.” *Mind & Language* 27 (2): 135–153.

Seyedsayamdost, H. (2015a). “On Gender and Philosophical Intuition: Failure of Replication and Other Negative Results.” *Philosophical Psychology* 28 (5): 642–673.

———. (2015b). “On Normativity and Epistemic Intuitions: Failure of Replication.” *Episteme* 12 (1): 95–116.

Sinnott-Armstrong, W. (2006). “Moral Intuitionism Meets Empirical Psychology.” In T. Horgan & M. Timmons (eds.), *Metaethics after Moore*. NewYork: Oxford University Press: 339–365.

———. (2008). “Framing Moral Intuitions.” In W. Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, Vol. 2: *The Cognitive Science of Morality*. Cambridge, MA: MIT Press: 47–76.

Sorensen, R. A. (1992). *Thought Experiments*. Oxford: Oxford University Press.

Sosa, E. (1996). “Rational Intuition: Bealer on Its Nature and Epistemic Status.” *Philosophical Studies* 81 (2–3): 151–162.

———. (1998). “Minimal Intuition.” In DePaul & Ramsey (1998): 257–270.

———. (2006). “Intuitions and Truth.” In Greenough & Lynch (2006): 208–226.

———. (2007a). “Intuitions: Their Nature and Epistemic Efficacy.” *Grazer Philosophische Studien* 74: 51–67.

———. (2007b). “Experimental Philosophy and Philosophical Intuition.” *Philosophical Studies* 132 (1): 99–107.

———. (2007c). *A Virtue Epistemology: Apt Belief and Reflective Knowledge*, Vol. I. Oxford: Clarendon Press.

———. (2009). “A Defense of the Use of Intuitions in Philosophy.” In Murphy & Bishop (2009): 101–112.

———. (2010). “Intuitions and Meaning Divergence.” *Philosophical Psychology* 23 (4): 419–426.

———. (2011). “Can There be a Discipline of Philosophy? And can It be Founded on Intuitions?” *Mind & Language* 26 (4): 453–467.

———. (2013). “Intuitions and Foundations: The Relevance of Moore and Wittgenstein” In Cusullo & Thurow (2013): 186–202.

———. (2014). “Intuitions: Their Nature and Probative Value.” In Booth & Rowbottom (2014): 36–67.

Spicer, F. (2010). "Cultural Variations in Folk Epistemic Intuitions." *Review of Philosophy and Psychology* 1 (4): 515–529.

Starmans, C. & Friedman, O. (2012). "The Folk Conception of Knowledge." *Cognition* 124 (3): 272–283.

———. (2013). "Taking 'Know' for an Answer: A Reply to Nagel, San Juan, and Mar." *Cognition* 129 (3): 662–665.

Stein, E. (1996). *Without Good Reason*: *The Rationality Debate in Philosophy* and. *Cognitive Science*. Oxford: Clarendon Press.

Stich, S. P. (1988). "Reflective Equilibrium, Analytic Epistemology and the Problem of Cognitive Diversity." *Synthese* 74 (3): 391–413; Reprinted in DePaul & Ramsey (1998): 95–112.

———. (1990). *The Fragmentation of Reason: Preface to a Pragmatic Theory of Cognitive Evaluation*. Cambridge, MA: MIT Press.

———. (2009). "Reply to Sosa." In Murphy & Bishop (2009): 228–236.

———. (2013). "Do Different Groups Have Different Epistemic Intuitions? A Reply to Jennifer Nagel." *Philosophy and Phenomenological Research* 87 (1): 151–178.

Stich, S. P. & Tobia, K. P. (forthcoming). "Experimental Philosophy and the Philosophical Tradition." In Sytsma & Buckwalter (forthcoming).

Stich, S. P. & Weinberg, J. M. (2001). "Jackson's Empirical Assumptions." *Philosophy and Phenomenological Research* 62 (3): 637–643.

Sytsma, J. & Buckwalter, W. (eds.) (forthcoming). *A Companion to Experimental Philosophy*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Sytsma, J. & Livengood, J. (2011). "A New Perspective Concerning Experiments on Semantic Intuitions." *Australasian Journal of Philosophy* 89 (2): 315–332.

———. (2012). "Experimental Philosophy and Philosophical Disputes." *Essays in Philosophy* 13 (1): 145–160.

Sytsma, J., Livengood, J., Sato, R. & Oguchi, M. (2015). "Reference in the Land of the Rising Sun: A Cross-cultural Study on the Reference of Proper Names." *Review of Philosophy and Psychology* 6 (2): 213–230.

Swain, S., Alexander, J. & Weinberg, J. M. (2008). "The Instability of Philosophical Intuitions: Running Hot and Cold on Truetemp." *Philosophy and Phenomenological Research* 76 (1): 138–155.

Szmuc, D. E. (2012). "A New Hope for Philosophers' Appeal to Intuition." *Essays in Philosophy* 13 (1): 336–353.

Talbot, B. (2013). "Reforming Intuition Pumps: When are the Old Ways the Best?" *Philosophical Studies* 165 (2): 315–334.

———. (2014). "Why so Negative? Evidence Aggregation and Armchair Philosophy." *Synthese* 191 (16): 3865–3896.

Thurow, J. C. (2013). “Intuition Theory of the A Priori, with Implications for Experimental Philosophy.” In Cusullo & Thurow (2013): 67–91.

Tobia, K. P., Buckwalter, W. & Stich, S. P. (2013). “Moral Intuitions: Are Philosophers Experts?” *Philosophical Psychology* 26 (5): 629–638.

Tobia, K. P., Chapman, G. & Stich, S. P. (2013). “Cleanliness is Next to Morality, even for Philosophers.” *Journal of Consciousness Studies* 20 (11–12): 195–204.

Turri, J. (2013). “A Conspicuous Art: Putting Gettier to the Test.” *Philosophers’ Imprint* 13 (10): 1–16.

———. (forthcoming). “Knowledge Judgments in “Gettier” Cases.” In Sytsma & Buckwalter (forthcoming).

Turri, J., Buckwalter, W. & Blouw, P. (2015). “Knowledge and Luck.” *Psychonomic Bulletin and Review* 22 (2): 378–390.

Vaesen, K., Peterson, M. & Van Bezooijen, B. (2013). “The Reliability of Armchair Intuitions.” *Metaphilosophy* 44 (5): 559–578.

Walden, K. (2013). “In Defense of Reflective Equilibrium.” *Philosophical Studies* 166 (2): 243–256.

Ward, D. E. (1995). “Imaginary Scenarios, Black Boxes and Philosophical Method.” *Erkenntnis* 43 (2): 181–198.

Weatherson, B. (2003). “What Good are Counterexamples?” *Philosophical Studies* 115 (1): 1–31.

———. (2014). “Centrality and Marginalisation.” *Philosophical Studies* 171 (3): 517–533.

Weinberg, J. M. (2006). “What’s Epistemology for? The Case for Neopragmatism in Normative Metaepistemology.” In Hetherington (2006): 26–47.

———. (2007). “How to Challenge Intuitions Empirically Without Risking Skepticism.” *Midwest Studies in Philosophy* 31 (1): 318–343.

———. (2009). “On Doing Better, Experimental-Style.” *Philosophical Studies* 145 (3): 455–464.

———. (2013). “The Prospects for an Experimentalist Rationalism, or Why It’s. OK if the A Priori Is Only 99.44 Percent Empirically Pure.” In Casullo & Thurow (2013): 92–108.

———. (2014). “Cappelen between Rock and a Hard Place. *Philosophical Studies* 171 (3): 545–553.

———. (2015). “Humans as Instruments: or, the Inevitability of Experimental Philosophy.” In Fischer & Collins (2015a): 171–187.

Weinberg, J. M. & Alexander, J. (2014). “The Challenge of Sticking with Intuitions through Thick and Thin.” In Booth & Rowbottom (2014): 187–212.

Weinberg, J. M., Alexander, J., Gonnerman, C. & Reuter, S. (2012). “Restrictionism and Reflection: Challenge Deflected, or Simply Redirected?” *The Monist* 95 (2): 200–222.

Weinberg, J. M. & Crowley, S. J. (2009). “Loose Constitutivity and Armchair Philosophy.” *Studia Philosophica Estonica* 2: 177–195.

Weinberg, J. M., Crowley, S. J., Gonnerman, C., Vandewalker, I. & Swain, S. (2012). “Intuitions and Caribration.” *Essays in Philosophy* 13 (1): 256–283.

Weinberg, J. M., Gonnerman, C., Cameron, B. & Alexander, J. (2010). “Are Philosophers Expert Intuiters?” *Philosophical Psychology* 23 (3): 331–355.

Weinberg, J. M., Nichols, S. & Stich, S. P. (2001). “Normativity and Epistemic Intuitions.” *Philosophical Topics* 29 (1–2): 429–460.

Wilkes, K. V. (1988). *Real People: Personal Identity without Thought Experiments*. Oxford: Oxford University Press.

Williamson, T. (2004). “Philosophical ‘Intuitions’ and Scepticism about Judgement.” *Dialectica* 58 (1): 109–153.

———. (2005). “Armchair Philosophy, Metaphysical Modality and Counterfactual Thinking.” *Proceedings of the Aristotelian Society* 105 (1): 1–23.

———. (2007a). “Philosophical Knowledge and Knowledge of Counterfactuals.” *Grazer Philosophische Studien* 74: 89–123.

———. (2007b). *The Philosophy of Philosophy*. Oxford: Blackwell Publishing.

———. (2009). “Replies to Ichikawa, Martin and Weinberg.” *Philosophical Studies* 145 (3): 465–476.

———. (2011a). “Reply to Boghossian.” *Philosophy and Phenomenological Research* 82 (2):498–506.

———. (2011b). “Philosophical Expertise and the Burden of Proof.” *Metaphilosophy* 42 (3): 215–229.

———. (forthcoming). “Philosophical Criticisms of Experimental Philosophy.” In Sytsma & Buckwalter (forthcoming).

Woolfolk, R. L. (2013). “Experimental Philosophy: A Methodological Critique.” *Metaphilosophy* 44 (1–2): 79–87.

Wright, J. C. (2010). “On Intuitional Stability: The Clear, the Strong, and the Paradigmatic.” *Cognition* 115 (3): 491–503.

———. (2013). “Tracking Instability in Our Philosophical Judgments: Is It Intuitive?” *Philosophical Psychology* 26 (4): 485–501.

Zagzebski, L. (1994). “The Inescapability of Gettier Problems.” *Philosophical Quarterly* 44 (174): 65–73.

Zamzow, J. L. & Nichols, S. (2009). “Variations in Ethical Intuitions.” *Philosophical Issues* 19: 368–388.

著者情報

笠木雅史（京都大学・日本学術振興会特別研究員 PD）